

工務局地盤改善局に伴う埋蔵文化財調査発掘調査

# 箕輪遺跡

上伊那郡箕輪村境 / 井中塚地区

1993年3月

長野県上伊那郡地質文化財教育委員会

工場用地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

# 箕輪遺跡

上伊那郡南箕輪村塩ノ井中田地区

1993年3月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

# 序

南宮町教育委員会

委員長 杉 澤 樹

このたび、南宮町土木建設委員会が、夏ノ月の中旬地区に工場用地造成工事を行うに当たり、遺跡の発掘保存のために緊急発掘調査を実施しました。

宮崎町から南宮町村へかけての、宮庭河原野の水田遺跡一帯は、弥生時代から現代に至る水田遺跡を中心とした大規模遺跡で、「宮崎遺跡」と呼ばれているところであります。この宮崎遺跡は昭和39年の伊藤土地株式会社設立による大規模な耕地整理事業の際、多くの遺物が出土したことからも発見されたものですが、南宮町地区での発掘はそれほど多くはなく、最近では昭和67年の宮崎野電気用の工場建設に伴う調査、平成元年の南宮野電増設に伴う調査、平成2年のニチノフ建設に伴う調査の3回、小規模ながら調査をしております。

今回の中旬地区では、発掘調査が約7,000㎡にもおよび、南宮遺跡としては本格的な水田遺跡の発掘調査となりました。しかも工期の都合で発掘調査調査から半世紀経つまで、わずかなヶ月をらずという短時間で終了させなければならず、たいへん苦労が多かったことと思います。ここに宮崎遺跡としては最も厚に当たる中旬地区の遺跡の状況が明らかとなり、報告書が編まれることは大きな喜びであります。

調査団長の本田秀明先生には、発掘から報告書完成まで一貫して中心となってご尽力いただきました。また、調査に向かいとなく足を運んでご指導くださいました歴史文化課の先生方や調査員の皆さん、それに発掘作業にご協力くださいました村内の方々の多くの方々に、たいへんお世話になりました。心より感謝申し上げます。

# 例 言

- 1 本書は、長野県上伊那郡東筑前村字中は204番地（以下簡に所在する実地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は東筑前村土地開発公社による工場地地の造成にともない東筑前村教育委員会が行ったものである。
- 3 発掘調査は平成4年4月24日から平成4年11月10日まで行い、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
- 4 本書作成における作業は、以下のように分務した。

遺跡地の発掘・トレース 本村秀樹、友松 隆、百瀬典博、百瀬千重  
土器、陶磁器の発掘・トレース 加藤智子 小沢よね子 百瀬千重 百瀬典博  
本館の発掘・トレース 小沢よね子 藤沢容子 藤 幹子 藤沢富美子  
百瀬千重 百瀬典博  
石器の発掘・トレース 藤沢富美子 百瀬千重  
土器の撮影 本村秀樹、百瀬千重、百瀬典博  
遺物一覧表 加藤智子、藤沢富美子 友松 隆 百瀬典博  
図面作成 友松 隆  
図版作成 友松 隆、百瀬千重

- 5 土器の図説は福沢幸一氏にお願ひした。
- 6 本書の執筆は本村秀樹、友松 隆が行った。
- 7 図版縮尺は1：40、1：100、1：200に統一した。
- 8 遺物実測図は2：3、1：4を基準としているが、寸違の場合に1：1、1：2を用いた。
- 9 筑前館長から本書の作成までの間、下部の機関並びに個人の方々に御指導・御協力をいただいた。感謝申し上げる。

○編纂 長野県教育委員会文化課・(財)長野県歴史文化財センター  
長野県教育委員会・古墳学研究所・名古屋山崎文化財研究所  
アルファ出版

- 10 調査・整理にあたっての労い土遺物及び図版等は東筑前村教育委員会で保管している。広く活用されたい。

# 本文目次

序	
目次	
本文目次	
挿絵目次	
索引	
図録目次	
第1章 遺跡の立場と調査	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 自然環境	3
第3節 歴史的環境	3
第2章 調査の組織	7
第1節 調査の組織	7
第2節 調査の体制	9
第3節 調査の経過	10
調査計画	11
第4節 調査の方法	15
第5節 試験調査の結果	18
第3章 基本単位	20
第1節 土層環境状況	20
第2節 基本単位	24
第3節 基本単位と遺構・遺物	24
第4章 遺構と遺物	25
第1節 遺 構	25
1. 溝状遺構 1号/2号/3号/4号/5号	25
2. 穴状遺構 1号/2号	26
3. 竪穴土室	28
4. 水堀状遺構	28
5. 土坑状遺構	29
6. 溝渠遺構	29

7. 自然史類	25
第2章 遺 物	28
1. 土器品、土器、陶器、磁器	28
(1) 古代の遺物	33
(2) 土器質土器 (オウチヤ)	42
(3) 平安以後の陶器、磁器について	65
(4) 平安以後の陶磁器類	66
2. 木製品	70
木皮	75
漆器	79
3. 石器	85
4. 金属器	90
5. 種子植物化石遺物	93
第V章 プラントポール分析結果	94
第VI章 附 録	113
索引	

# 挿 図 目 次

第 1 図	透視位置図	1
第 2 図	地形・地質区分図	2
第 3 図	河川通称分布図	4
第 4 図	調査路線図	8
第 5 図	トレンチ設置図	16
第 6 図	プット設置図	17
第 7 図	トレンチ探検状況概観	18
第 8 図	F トレンチ探検区画地土状況	19
第 9 図	トレンチ土層断面図 1	21
第 10 図	トレンチ土層断面図 2	23
第 11 図	探検通称分布図	24
第 12 図	1号・2号調査線	25
第 13 図	1号・3号調査線	26
第 14 図	水層状況探検断面図	26
第 15 図	3号調査線図	26
第 16 図	水層状況線 I	27
第 17 図	水層状況線 II	28
第 18 図	水層状況線 III	41
第 19 図	水層状況線 IV	43
第 20 図	水層状況線 V	44
第 21 図	水層状況線 VI	45
第 22 図	水層状況線 VII	46
第 23 図	水層状況線 VIII	47
第 24 図	土質状況線	48
第 25 図	1号坑内分布図	49
第 26 図	1号坑内 I	51
第 27 図	1号坑内 II	52
第 28 図	1号坑内 III	53
第 29 図	2号坑内	55

第30章	自然地理	53
第31章	瑞士土壤学概论·概要篇	60
第32章	瑞士土壤学概论·概要篇	61
第33章	瑞士土壤学概论·概要篇	63
第34章	瑞士土壤、气候学概论·概要篇	64
第35章	瑞士土壤、植被学概论·概要篇	67
第36章	瑞士土壤学概论·概要篇	68
第37章	瑞士土壤学概论·概要篇	69
第38章	瑞士土壤学概论 1	71
第39章	瑞士土壤学概论 2	73
第40章	瑞士土壤学概论 3	75
第41章	瑞士土壤学概论 4	76
第42章	瑞士土壤学概论 5	77
第43章	瑞士土壤学概论 6	78
第44章	瑞士土壤学概论 1	80
第45章	瑞士土壤学概论 2	81
第46章	瑞士土壤学概论 4	82
第47章	瑞士土壤·植被学概论	83
第48章	瑞士土壤学概论 5	85
第49章	瑞士土壤学概论 6	86
第50章	瑞士土壤学概论 7	87
第51章	瑞士土壤学概论	89
第52章	金属学概论 1	91
第53章	金属学概论 2	92
第54章	金属学概论	93



# 表 目 次

第1章 河川環境一覽表	4
第2章 土器・陶器類一覽表	39
第3章 土器質土器類一覽表	42
第4章 土器・陶器・磁器一覽表	45
第5章 陶器・磁器類一覽表	49
第6章 木製品類一覽表	70
第7章 木製品類表	79
第8章 石製品類一覽表	88
第9章 金属製品類一覽表	99
第10章 出土動物骨子一覽表	93

# 図 版 目 次

図版1 遺跡調査地状況写真
図版2 調査地位置・調査地位置
図版3 トレンチロー工土層断面・トレンチロー工土層断面
図版4 遺状遺構1号・遺状遺構4号
図版5 遺状遺構2号・木簡状遺構
図版6 1号柱列目・1号柱列面
図版7 2号柱列・2号柱列打ち込み状況
図版8 埋藏遺構1・埋藏遺構2
図版9 土坑状遺構・土器質土坑状
図版10 出土土坑1
図版11 出土土坑2・出土木製品1
図版12 出土木製品2
図版13 出土木製品3
図版14 出土木製品4
図版15 出土土器・出土土器類・出土陶器土器・出土土器系土器
図版16 出土陶器土器・出土土器系土器1・出土土器系土器2・出土土器系土器

圖版17 出土陶器 1 - 出土陶器 2 - 出土陶器 3

圖版18 出土陶器 4 - 出土陶器 5 - 出土陶器 6

圖版19 出土石磨 - 出土青銅 - 出土陶器 - 出土石器 1

圖版20 出土石器 2 - 出土磨石

圖版21 出土金屬器 1 - 出土金屬器 2 - 出土銅幣

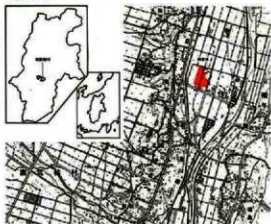
# 第I章 遷移の立地と環境

## 第1節 遷移の位置

宮城遷移は北沢町上伊原町宮城村と隣接する茨城町の大塚川西岸、大塚川と国道124号線の間にある沖積平地に位置する。丁度北緯36度線付近から南下駅に至る本筋海岸、工業地帯はほとんどこの遷移に入っている。一帯に茨城遷移と書かれている遷移の面積は東西1.5km、南北5kmと広範囲なものであり、すでに30ヶ所の調査が行われている。

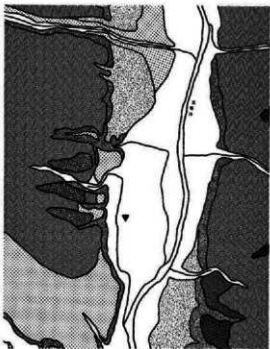
遷移の大部分は行政上茨城町に属しており遷移の南端部が宮城村に属している。この広い遷移内には、入新下・塩ノ浜・北原(茨城村)・曾根田・新田・久田・藤田・大塚水・小塚水・新田原・城守中・宮野・黒田(茨城町)等の小字に分かれており、更に地名は別命を数える。

今回の調査地点は、上伊原町宮城村394番地及び395番地ノ并中の地蔵と呼称されている所に設置している。



第1図 遷移位置図

1:5,000



第四纪沉积物

凡例



白垩纪沉积物

图2-10 福州-地质区划图

## 第2節 自然環境

高尾山村は天竜川上流地域にあり、西部の本誓山脈、東部の赤石山脈の間に開けた伊豆山地の東西の端の最も深い（標高1300）部分の天竜川沿岸に位置している。天竜川の右流岸と大森川を以てこめとする小沢川の扇状地の広がる村である。本誓山脈北端の嶺ヶ岳山頂から源流川、大森川の上流（地質学的には「新第三系、南関東」の流出によりなだらかな段丘をつづっている。高い段丘頂を南麓部、低い段丘を沖平段部と呼称している。またこの下に天竜川流の上流部が崩壊まで覆っている。段丘下には扇状部や扇状部から伏流水となっていたのが天竜川源と沖平段との間に湧水となって出ており、湧水も湧かなくなり埋没されてきた。また、現在でも「湧水わきび敷地」に利用されている。扇状部北端から東を流れる天竜川との間は沖平段として古くから水田地域となっている。この沖平段は天竜川の右流岸で東西から流れる天竜のため天竜川が大きく迂行し、扇状部により成積に大きな差が見られ、本願寺地（中野）・園ノ井・八倉下地区は割合狭い。

天竜川の西部に扇状部があり赤川と呼ばれ、その西部に平行して扇状部があり自然環境的の位置を意味していただろう。扇状地の西部に広がる低地が埋没地地帯であると思われる。本願寺地帯はこの埋没地帯に位置している。

園ノ井・中田地区は、昭和27年から行われた土地改良事業以前、この地は湧水地・池田部・田部・扇部・扇部となっており、人里も広がるがあまりにもこちらに位置し、一帯が大森川等であった。また天竜川扇状部により段丘上が水田化され、段丘下の湧水の量も増加し扇状化に動きかけていた。土地改良により一帯が沖平段化してきている。

## 第3節 歴史的環境

### 1. 高尾遺跡の歴史

高尾遺跡については現在までに多くの遺物が発見されている。特に高尾町歴史委員会では遺跡内の地点調査を数回行っており、その成果が発表されている。

天竜川の右流岸に存在している。本遺跡が世間にも知られるようになったのは、今から約半世紀前、昭和27年から30年におわたって行われた土地改良事業によって多量の遺物が出土したことによるものである。暫くも土地改良事業中ということもあり、発掘調査の発表までには至らなかったが、その成果は高尾史学研究会によって民間に公開され、多くの出土遺物は地元郷土史家の小島修典（故人）・小沢守人（故人）によって収集保存されていた。今も、本遺跡の存在は両氏の多大な精力なしには語れないところである。遺跡は、天竜町から高尾山村にまたがり扇状部100〜200メートル以上と考えられ、大森水・小森水・菅野・尾巻・新田部・新田部東・新田部西・大井・新田・菅野・八倉下等の多くの小川によって区分される。出土遺物は、縄文中・



1.2.10

- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |
| ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ⑮ | ⑯ | ⑰ | ⑱ | ⑲ | ⑳ |
| ㉑ | ㉒ | ㉓ | ㉔ | ㉕ | ㉖ | ㉗ | ㉘ | ㉙ | ㉚ |
| ㉛ | ㉜ | ㉝ | ㉞ | ㉟ | ㊱ | ㊲ | ㊳ | ㊴ | ㊵ |

图 1.2.10 植物茎的横切面

後・後周土器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、式部陶器、中・近世陶磁器まで時代の幅がみられる。また、瓦葺・田下敷・木製棺・船などの遺構のほか、大塚や飯ノ井等に遺ると思われる水田が出土しており、水田耕作を裏付けるものと見よう。更に注目されるのは、大塚水田遺構から出土した木製人形、瓦葺、水の中や、耕作田周囲より多数に出土した土器を中心とする弥生土器、土師器などで、水田周辺に耕作するであろう集落的遺構の存在が明らかに予想される。しかし、これらはいくまでも土壌改良工事中に出土した遺物であり、大きな発見は望めない範囲と認識を改すこととなった。(筑後道が報告書第1次より)

その後出土遺物は筑後町弥生土器博物館に収蔵され、遺物の保存及び研究が進んできている。昭和55年(国道15号線の延伸・バイパス工事に伴う小塚水・大塚水の水質調査が行われ、土師器・須恵器・水田瓦が検出されたが、水田瓦と土師器等が検出せず大塚遺跡等時代決定は困難であった。昭和56年(前年度)の水質調査の結果から本調査を行う。

昭和57年度は沖年に続き第二次水質調査が行われた。結果として瓦が打ち込まれた水田瓦に併行して瓦葺を調べ、ところどころに石の置かれた遺構や水田が方形に耕作されていること水田による堆積、水の流入口施設が検出されたことは特に注目される。

昭和58年度筑後町弥生土器博物館等に調査した中塚地区の調査を行った。大塚町の位置が予想以上に大規模であり遺構、遺物を改すことなく全てを撤去撤去してあり土層の一部から、土層の調査を希望しようとしたが予算不足も得られなかった。

平成3年(木下区公民館建設に伴う調査(国道新・大塚水)小塚遺跡により遺構、遺物の検出は見られなかったが、プラント・オーバーンに分根による水田層の検出ができた。また木下区永通草履草等知事施設設置に関して筑後地域の地質調査が行われ、水田瓦に伴う水田遺構の検出と耕作田の掘られる以前の大塚川の掘削する一帯における耕作の遺構が検出された。

平成4年(水田遺跡発掘調査改良事業に伴う調査)が行われ水田瓦七の他の遺物が検出されている。高宮地区においても、飯ノ井、水田遺跡(高宮町)遺跡等で工事現場に伴う調査が(昭和57年の佐賀県地質調査課、平成3年の筑後道調査課、平成3年のコナノクエス)小塚遺跡ながら行われた。しかし、飯ノ井や飯ノ井の検出にとどまり、目立った遺構、遺物は認められなかった。

## 2. 水田遺跡との関係

高宮地区には多数の遺跡が存在しているが、一番注目されているのは「種子産遺跡」である。弥生時代前期の「種子産型」の一部。(遺跡文化財指定)を抽出させた遺跡である。

前述の如く筑後道は沖積層上の遺跡であり他の遺跡は全て粘土上に位置している。筑後道は遺跡の性質上この粘土上の遺跡と密接な関係しものにと望まれたことは明確であろう。

本遺跡の周辺遺跡についてみると、飯ノ井・大塚遺・高塚外・大塚下・筑後道・内塚・高塚外・高塚内・北塚外遺跡は発掘調査が行われ高塚内弥生土器Ⅰ-古墳時代前期内塚の調査が検出され

た。天竺道場これも阿蘇開墾され有る時代—平安時代の住居址多敷を傳出。熊丹・上人窟・鹿宮・山の神・向内窟・丸山古墳(武丹・子孫塚記)、寶輪町に入ると熊鹿・熊城・北城・上ノ井・下高古城と段々上に北城址跡が確認されている。天竺(阿蘇)では北熊丹・熊野山・信心寺下・上金・大原の各遺跡が見られる。

寶輪町北島の天宮古墳(上伊賀郡唯一の前方後円墳)の出現。中世(隆武年間)になってこの竹野平池(水田池)に墨井行雲の宮中邸の遺基。武野燭火が熊野山に上り常盤原が三日町を風本に土地の守護もこの広い水田とかわかりを持つものと考えられる。江戸時代の丸屋・墨ノ井の調査資料から見ても段々上に北へて北城址になっている。

以上北城址を取り巻く遺跡を見た時、遺跡先遺地と後遺地を結びつける遺跡・遺物を見ることはできないが、遺跡基から見ると、北城外遺跡の屋内地形跡がこの先遺地に一つの祠跡を設けておけるのではないかと思う。しかし、歴史において人々の生活(風俗社会)とその基礎である食糧を考えたければならぬ。その意味では天竺道場を離らずして天竺地域の事を究明することはできないと思う。これから一層の努力を要すると思われる。

表1表 阿蘇道場一覽表

番号	遺 跡 名	地 区	立 地	期 代						備 考
				弥生	古墳	鎌倉	室町	江戸	明治	
1	天 竺	天竺山	平池		○	○	○	○	○	昭和17~18年3月30日調査
2	北 城	北 下	遺 址			○		○	○	
3	熊 城	北 下	遺 址		○			○	○	
4	鹿 宮	北 下	遺 址			○		○		
5	丸 山	北 下	遺 址							
6	丸 屋 下	丸 屋	平池				○			
7	熊 野 山	丸 屋	遺 址		○	○				
8	向 内 窟	丸 屋	平池					○		
9	向 内 窟	墨ノ井	遺 址		○	○	○	○		
10	山 の 神	墨ノ井	遺 址		○	○				
11	天 田	墨ノ井	遺 址		○	○		○		昭和17年調査
12	墨ノ井	墨ノ井	遺 址			○				
13	内 城	北 城	平池		○		○			
14	熊 鹿	北 城	遺 址		○					
15	熊 鹿 山	北 城	遺 址			○	○			
16	熊 野 山	北 城	平池		○	○		○		
17	北 城 山	北 城	遺 址			○	○	○		平成2年調査
18	熊 野 山	北 城	遺 址		○					
19	熊野山古墳	北 城	平池		○	○				



## 第Ⅱ章 調査の経緯

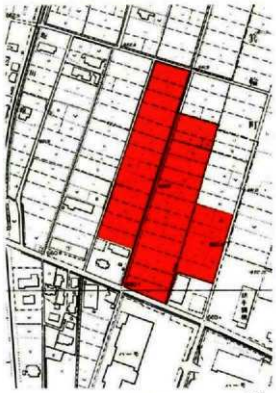
### 第1節 調査の契機

真輪地区は真輪村から真輪町にわたって広がる大規模な水田灌漑として、昭和27年から行われた伊賀土地改良組合による土地改良事業を機に加えられるようになった。

真輪地区の大半は真輪町地域であるが、灌漑の範囲は真輪村地域になっており、半田の調査以前に2回調査が行われてきている。しかし、いずれの調査地も耕土下は全面が灌及び自然堆積の耕土層の工事で灌漑は認められず、自然水・水成・風成等の灌漑が出土したが真下灌漑によるものであるため灌漑調査は行わなかった。尚し、調査地の灌漑部分については何れも人工的堆積物を埋める際には、詳細な灌漑調査が必要であるということとなった。

村は灌漑を灌漑し村の活性化をはかるための一環として、工業団地の計画を推進し企業誘致の向上をすすめてきた。これによって土地開発公社は土地利用調整にもとづき天竜川の河岸段立下、真輪村大字宇田45番地（他が第）の総面積約2000㎡を工業団地に選定し、平成4年10月までおぼろぎに造成することとなった。これをうけた村教育委員会は調査予定地が灌漑の遺跡である真輪地区の一部であり、所在地が教育用地という地目的条件に恵まれ、また灌漑の調査促進等から調査の必要があると考え、調査公社・長野県教育委員会文化課と協議協議を行い、土地灌漑の灌漑調査をすることとなった。

以上の経過の後、調査団を編成し調査を行った。



MAP NUMBER



## 第2節 調査の体制

### 南宮輪村教育委員会

#### 調 査 員

調 査 員	本 部 長	長 岡 清 夫	長岡県文化財保護審議委員
調 査 主 任	支 部 長	藤 田 隆 夫	南宮輪村教育委員会学務員
調 査 協 助 員	部 長 代 行	宮 崎 正 久	南宮輪町立南宮輪中学校学務員
		伊 藤 茂	南宮輪町立南宮輪中学校学務員
		小 平 勲 夫	南宮輪町立南宮輪小学校教諭

#### 調査に参加された方々（調 査 員）

加藤明治 白鳥貞子 原武雄一 飯久隆吉 加藤智子 原武富美子 原武節子  
小沢正由子 加藤千代子 加藤節子 藤本九代子 藤本勝 藤本千子 山口節子  
菅野俊雄 久保隆男 石倉俊彦 本間定美 西沢秋かつ子 藤本節子 北原智三  
原由良 明石隆吉 藤田隆一 原武賢之 日戸武雄 藤本節子 藤本千代子  
藤 本 正 樹 藤 本 山 田 武 郎 藤 本 千 重 藤 本 尚 晴 小 崎 尚 利 正 小 崎 守 正  
山本貞子 久保隆子 原内明 菅野俊治 大野ひとみ 原武安子 藤本節  
長が隆五郎 伊藤武雄 伊藤茂雄 藤高うた子 小崎祥弘 倉田和英 藤本節  
飯久隆吉 伊藤高子 西村孝 山口福平 丸山隆一 藤村誠人 小崎隆貴  
原田節子 長尾千代子 高橋あゆ子

#### 参 照 員

長が隆五郎	南宮輪村教育委員会委員長（平成4年10月）
加藤 隆	南宮輪村教育委員会委員長（平成4年10月～）
丸山 博志	南宮輪村教育委員会次長
西野 盛雄	南宮輪村教育委員会社会教育係長
加藤 純治	南宮輪村教育委員会学校教育係長
赤川 昌隆	南宮輪村教育委員会学校教育係
松澤真太郎	南宮輪村教育委員会社会教育係主事
藤山 文男	南宮輪村教育委員会社会教育係
田中 隆	南宮輪村教育委員会社会教育係
山崎 隆夫	南宮輪村教育委員会社会教育係

### 第3節 調査の経過

平成4年4月28日、調査行為に伴う庁舎内調査が開始され、5月11日の事前協議により試験調査を行う事となった。7日に調査地を踏査し、調査地の様子について今後の調査の進め方を検討した。5月8日から現場作業に入り、22日には本格的な水田調査に向けてであったので同じ高橋建設内で行われていた夏播期の調査を見学し、観察を行った。

試験調査は5月23日から7月16日までトレンチ調査を行い遺物の有無と土がりを確認した。調査地のトレンチから土器・陶器類・木炭等の遺物、土灰・土器を用いた埋め戻しの遺物・木炭等を確認した。プラントオペールの分析においてもそれぞれトレンチの各層から検出され、中層部試での水田遺物の存在が明らかとなった。試験調査を終了し、7月20日に行われた関係会社・地元農協との事後協議の結果、状況からみて実際に調査を行うのは困難であるが比較的土層構造が安定し遺物の落ち込みが深く調査試掘の中心で土層が揃ってであろうと認められる部分について、遺物を扱うことを中心に調査を行うこととなった。だが、最初の試験調査ではまだ層の土がりと遺物の範囲が不明であったため、8月3日より新たにトレンチを調査試掘中央部から本設定し、内4本を掘削しては日まで調査を行った。

以上の調査により、おおよその層の土がりが確認できたので、8月18日の調査打ち合わせでもっとも遺物のある3層を中心に調査を進めて行くことになった。22日より本調査を始めた。調査地は地下水量が多く排水ポンプを稼働させなければならなかった。機材が朽ちるまでは、雨が降ると調査区に水が湧きトレンチの位置がわからなくなる程だった。

機材が腐け夏季に入ると急激な急激な水分の蒸発による地表面の乾燥を防ぐために定期的に水をかけるなど、調査を行う前の準備だけでも一言苦であった。

当初の調査の終了予定は7月下旬頃までとなっていたが、調査範囲の広さと多くの遺物・遺物の出土により延期を余儀なくされ、9月9日の協議により10月末まで調査を延期することとなった。



## ○調査日誌

6月5日 トレンチの設定 (A～G)

13日 トレンチの設定

25日 トレンチC-1・C-2・C-3・D-2の掘削。トレンチC-1より暗褐色炭、C-2より灰褐色が出土する。地下水が多く、すぐにトレンチに水が湧いてしまう。

26日 トレンチA・B-1・C-2・Gの掘削とトレンチC-1の土層観察、測量を行う。トレンチAとB-2より自然風土と半乾土が出土する。

27日 トレンチC-3の土層観察と測量を行う。

28日 トレンチC-2から出土した灰褐色の炭層とC-3の断面測量を行う。

7月1日 トレンチC-3の断面測量の続きと、B-2・E-2の掘削作業を行う。

2日 トレンチE-1とFの掘削。E-1からは南北方向にわたり傾斜とそれを下から支える形で灰が2本出土する。Fからは多量の灰と地下鉄が出土する。これと平行してトレンチD-2の断面測量を行う。

3日 プラントオーバーホール分析の土層採取のための古建築研究所の職員の方が来る。トレンチFの遺物が出土した地点を把握し、平面図をとる。

5日 トレンチE-2とD-2の断面測量を行う。

7日 トレンチFの断面測量。把握した部分の平面測量と遺物の取り上げを行う。遺物を取り上げた後、灰の層へ掘り下げると暗褐色炭の下からトレンチE-1で出土したものと同一種類の灰が出土する。

8日 トレンチE-1・F・Gの断面測量を行う。

9日 作業員が3人になる。トレンチB-2の断面測量を続けて行う。

10日 寺田に続き3人でトレンチA・B-2の断面測量を行う。

11日 残りのトレンチB-1・B-3の断面測量を行う。午後になって全ての断面測量を済め、片付けと全体測量に入る。

14日～16日 全体測量を行う。

8月1日 南北方向のトレンチEを再設定。

3日 直線によりトレンチI-1・I-2・I-3を掘削する。I-1より傾斜と灰が出土する。

4日 トレンチHの掘削とI-1の土層観察、測量を行う。

5日 トレンチI-1の断面測量を行う。

6日 トレンチI-2の土層観察と断面測量を行う。

7日 寺田に続いてトレンチI-3の断面測量を行う。

- 10日 トレンヂー3の土層観察と断面測量を行う。北側より枕列と溝列が出土する。
- 11日 トレンヂー3の断面測量を行う。
- 11日 トレンヂ4の土層観察と断面測量を行う。
- 12日 午前中にトレンヂ4の断面測量を終了し、片付けを行う。
- 20日 遺構でトレンヂ1-1とC-2をつなげて築木溝にする。
- 21日 遺構により調査区域の表土の厚さを測り、一部土層観察を行う。
- 22日 昨日に続いて表土の厚と土層観察を行う。
- 24日 土層観察を終り、溝状の遺構、立ち杭、土層観察を復元する。
- 25日 土層観察を引き続き行う。
- 26日 溝状遺構の検出と出土した土層観察の写真をとる。
- 27日 トレンヂ1-1の断面を掘り掘り上げる。遺構跡、溝跡などが出土する。
- 28日 昨日、検出した遺構を中心に拡張作業を進める。
- 29日 遺構の中央部を遺構により掘り上げ、土層観察を行う。南と北方向にのびる枕列を復元する。
- 31日 溝状遺構と枕列、水舟などの断面測量をする。昨日、遺構により掘り上げたトレンヂ1-1西への溝状遺構の広がりを確認する。
- 8月1日 断面測量の続きと西側にのびる溝状遺構の検出を行う。写真撮影のためのやぐらの設置準備をする。
- 2日 松竹土遺構の断面測量とトレンヂ1-1の西側を準備で拡張作業を進める。
- 3日 昨日に続いて拡張作業を進める。
- 4日 3m四方のグリッドを設定、写真撮影を行う。
- 8月5日～7日 拡張作業を進める。ヤリタタの設置
- 8日 南北にのびる溝を復元しそこを中心にして拡張作業を進める。  
これを1号溝とする。
- 9日 2号溝の検出作業を行う。
- 10日 続けて溝の検出作業を進める。トレンヂ1-1の西で枕列を復元する。これを2号枕列とする。
- 11日～14日 溝の検出作業と枕列の検出作業を行う。溝の復元に時の急にしたと思われる遺構を復元する。
- 15日 2号溝の断面測量と平行して枕列の断面測量を行う。遺構で築木を確認する。
- 16日 2号枕列の断面測量と溝本の検出を行う。
- 17日 1号溝と2号溝の切り合いから双方の前後関係を確認。断面測量を行う。
- 18日～21日 溝の断面測量と枕列の断面測量を併せ行う。測量が終了した後、写真撮影をする。

- 22日 トレンチHの掘削部分の表土撤去作業を行う。ここでも正誤を確認。トレンチHとI-1の間の中央部を再び掘りけずり、両表土が南北に連続に延びているのを確認する。
  - 23日 掘削に延びる両表土を一気撤去し、覆土をみる。2号坑内の遺物の取り上げ作業を行う。
  - 24日 ベルトを巻く。両表土を撤去。自然状態の検出を行う。
  - 25日 続いて自然状態の検出を行う。石造・瓦溝を確認する。また、1号坑内の調査を行う。
  - 26日 自然状態の平面調査と断面調査を行う。トレンチI-1裏の1号段の遺物の取り上げとその奥の坑内の断面調査を行う。
  - 27日 自然状態の調査を終えて終了したのも、写真撮影を行う。またトレンチI-1の裏を平作業で掘り下げる。
  - 28日 1号坑内・自然状態の調査と遺物の取り上げを行う。1号段の奥から1号坑内の奥まで掘られる溝が出土。拡張作業を行う。
- 10月1日 新たに出土した1号坑内の掘削部にサブトレンチを入れる。また自然状態の遺物を取り上げる。トレンチH奥の掘出土部分の遺物の取り上げを行う。掘削によりC-2とD-2間の表土剥ぎを行う。
- 2日 今まで調査したところの遺物を取り上げ4層の底層を確認するための調査で3層を削る。
  - 3日 トレンチC-2・D-2間をB地区とし、東部分の上面掘削を行う。
  - 4日 昨日の掘のための作業の進捗が上がらない。A地区南側の表土遺物の取り上げを行う。
  - 7日 B地区の東部分で坑内を確認。そこを中心に拡張作業を進める。
  - 8日 B地区で噴き遺物を確認する。さらに南側に奥が3層上面まで掘り下げる。A区ではさらに4層上面まで掘り下げる。
  - 9日 昨日の続きとB地区で出土した陶器の取り上げを行う。
  - 12日 B地区南部分でサブトレンチをあげまた3層上面までいっていないことを確認。掘削により2層をとる。東部分の写真を撮る。
  - 13日 昨日に続いて掘削が進く。東部分ではA区の噴き遺物につながると思われる溝を確認する。
  - 14日 A地区の東部分を6層まで削る。表土が出土する。B地区中央で2号坑内の底まで掘られる坑内を確認する。  
午後以降は作業は中止。

- 16日 A地区4層の建物の取り上げと重機により4層上面まで掘り下げる。  
B地区では1号坑内の続きと思われる積戻をともなう坑内を確保  
トレンチD-2・E-2間をC地区とし、重機により表土はざをする。
- 17日 1号坑内の続きの掘削と2号坑内の調査をする。C地区東3層の上段積戻をし、掘  
を確保する。
- 18日 昨日に続いて作業をすすめる。C地区では確認した層の掘削を進める。また、東側  
に2号坑間でサブトレンチを入れる。
- 21日 B地区全体の4層を出しにかかると、1号坑内の続きの調査を行う。C地区西のレキ  
の掘削している所で坑内を確保、拡張作業を行う。
- 22日 B地区東で坑内を確保、拡張作業を進める。C地区の現状確認の調査
- 23日 昨日確認した坑内はB地区全体にわたっていることが分かり、さらに掘り進める。  
C地区の坑内とつなげると判断する。
- 24日 B地区トレンチ1-2間で掘を確保、掘削作業を行う。  
B～C地区にかけての坑内の掘削を進める。
- 10月25日 A地区の建物で建物の写真、取り上げを行った後4層を出すため重機で掘り下げる。  
B～C地区にかたる坑内確保の掘削を進める。
- 27日 昨日の作業を続けて行う。C地区の現状確認の掘削が終わり、調査を進める。
- 28日 A地区の4層を手作業により出すが、進捗は確認できない。  
B～C地区の作業を進める。
- 29日 雨天で作業中止とするが、午前中C地区で重機が動く。
- 30日 トレンチC-2の掘削を進めしレキ層の立ち上がりを確認する。C地区の現状確認  
の横で現状に追いつく砂を確保、サブトレンチを入れたところ多量の土層が出土す  
る。  
西側の坑内の掘削作業を進める。
- 31日 昨日について作業を行う。
- 11月2日 B地区東側の建物の取り上げを行い、4層を出すため重機で掘削。  
C地区の現状確認の掘削調査と建物の取り上げを行い、さらに下へ掘り下げる。
- 3日 昨日について作業を行う。出土した建物の調査と取り上げを行う。
- 4日 B地区東の4層の上段掘削を行い確認のものを確保、掘削作業を進める。C地区の  
現状確認の掘削も増設掘削が出土する。
- 5日 西側の坑内はかなりの長さになったが、まだ完全に掘削できていない。トレンチ1-2  
の間で現状確認を掘削する。
- 6日～7日 約50mにおたる坑内を掘削するための重機用の調査用の方々に平たいに掘り進め



- く、全員で確認にあたる。また、C地区現場で撮影した環境撮影の写真をとる。
- 8日 航空測量のための写真撮影を行う。午後になって雨が降ってきたため3時に作業を終了する。
- 9日 昨日撮り残った写真をとつて区内の建物と柱の取り上げ作業を行う。午後3時に全ての作業を終了。無事式を行い本調査を全て終了する。

## 第4節 調査の方法

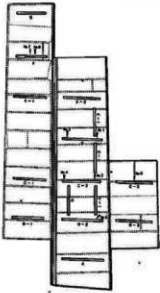
調査は、任意で設定された30°四方に区切られたグリッドを基準に3本のトレンチを設定し、内2本を掘削した。さらに遺物の広がりを確認するための中央のトレンチに直行するようにも本のトレンチを設定、内1本を掘削した。トレンチの掘削後、フロントオーバー分析のため各トレンチの土壌採取を行った。分析の結果、各採取地点の掘3層から高い層でフロントオーバーが検出された。また立坑などの遺物が3層に多くみられたことから、3層を中心に調査を進めて行くこととなった。

その後、遺物により3層までの遺土をけずり、30°四方のグリッドを20°四方のグリッドに切り直し東西方向のラインに基準線平、南北方向のラインにアルファベットをつけた。

トレンチ1-1・HとC-2をつなげ排水溝とした後、トレンチC-2とD-2を直交に調査区を3つのブロックに分けて、南から順に北へA・B・C地区とし調査を進めた。

調査は水田層上面を境界にとらえる事が困難であることから、柱列を目安に調査を進めた。トレンチC-2掘削分については、フロントオーバー分析から3層のほかにも4層・5層で水田耕作が行われていた可能性があることから、その周辺は3つの層の調査を行った。

1945年10月  
 1945年10月



第10図 トレンチ敷設図

1/1000

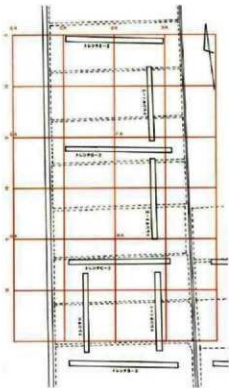


図4 図 グリッド敷設図

1/100

## 第5章 試掘調査の結果

調査区北端にわたってトレンチ調査を行った結果、支尾川の影響によりできた埋層の厚み込みが不均一になっていることが判明した。それは調査区中央から西側の範囲内で3つあり、それが南北方向にのびていることがみとめられた。

土層の埋層状態はこの埋層の厚み込み部分から比較的に定めており、耕作による擾乱も第3層より下では明確にはみられなかった。埋層の厚み込み部分には調査区全体にわたって埋層厚がみられた。調査区中央より東側では、第1層は埋層になっており、このあたりが土層改良以前にあった自然埋土の一部分に入ると推定した。

遺物は、木炭、木製品、土器系土器、陶磁器などが確認された。遺物は北河と見られるものまたは、埋層を穿った埋層状態遺物を確認したが、すべて調査区全体にみられる第3層の埋土層中からであった。特にトレンチでは多数の木炭と第1層と見られる木製品を確認し、トレンチ北端により調査をおこなった。(図7-8)

試掘跡はトレンチの中央から西側にかけての部分で埋土下45cmの第4層の上層である。

ほとんど木炭は割れた状態で出土したが、いくつか打ち込まれた状態もみられた。薪材でつくられた埋層高度がみられるが、4層を穿り込んでつくられているので近代のものとは推定する。また、埋層高度の下に南北方向に敷かれた溝渠を抽出した。埋層4層のものが薪材に加工してある。時代を推定する遺物は、4層中より土器系土器の遺物が出土したが、これがこの遺溝に結びつくのか定かではないので、はっきりとした遺溝の時代推定はできない。

プラント・マクロ分析では、調査区の第3層から4層で、またトレンチC-1遺溝の埋層の厚み込み部分に埋層している第3層と第7層において木炭遺物のある可能性が明らかとなった。



図7-8 トレンチ試掘跡位置図

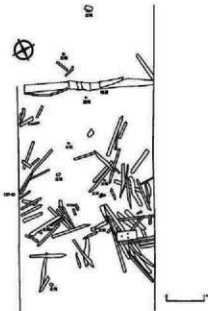


図10 トラシ中層部出土状況

## 第Ⅲ章 基本層位

### 第1節 土層堆積状況

地質調査調査として調査地区全域を対象に12本のトレンチを設定し、トレンチ調査を行なった。各トレンチの土層堆積状況はトレンチごと異なり、唯一性は見られなかった。調査地域を形成しているが河川の流路、池、開拓池、土地改良の際の客土等人工的な土層の堆積などにより堆積状況が異なっているので、おもなトレンチの内容を説明する。

#### C-2トレンチ

トレンチの深層・20mまで、1、2、3、4層目に粘土層があり基礎層となっているが原則には粘土層が見られない。基礎層までの深さ20m位いで5～6分層され比較的安定した土層堆積状況を示している。

- 1層—暗黒褐色シルト層の粘土層（暗夜水煎層）15～20mの厚さである。
- 2層—細粒砂を含む暗灰色シルト層の粘土層、20mの厚さがあり、草木根をまばらに含んでおり粘性がある。
- 3層—暗灰色シルト層、粘り、腐りもある、厚さ15m。
- 4層—暗黒褐色シルト層でわずかに細砂を含む、15m位いの厚さで粘性、腐りも割合強い。
- 5層—草木根の腐植土を多く含む暗褐色細砂層のシルト層、厚さ15mで腐りが強い。
- 6層—草木物を少量含む暗灰色シルト層、20mの厚さを腐り粘性、腐りも強い。
- 7層—砂礫層（基礎層）

#### D-2トレンチ

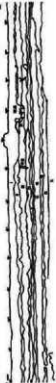
東へ向かって急に基礎層が高くなって行く。河川の堆積土は割合安定している。

- 1層—細粒の水煎層で暗灰色細砂層のシルト層、厚さ20m位いである。
- 2層—細粒の砂分を含む暗褐色細砂層のシルト層、粘り、腐りも強い、15mの厚さ。
- 3層—暗灰色シルト粘土層、厚さ15m粘りは強い。
- 4層—暗灰色粘土層、粘り、腐りも強い、厚さ7mを渡る。
- 5層—細粒の砂分を含む暗灰色シルト層の細砂層、腐りはある、厚さ5m。
- 6層—暗灰色シルト層の粘土層、厚さ10m、粘り、腐りとも強い。
- 7層—暗灰色シルトがわずかに粘る粘土、厚さ20m。
- 8層—暗褐色粘土層、厚さ7m
- 9層—草木根を含む灰泥層、厚さ5m、粘り腐りとも強い。
- 10層—細粒の灰泥細砂粘土層、厚さ15m。

1000倍



1000倍



1000倍



植物の茎の組織(1)

## 11層一砂礫層（基盤層）

### Fトレンチ

基盤層までの深さが10m～20mで7分層され、比較的安定した土層堆積状態を示しているがトレンチの傾斜と北側とのうねりのあるトレンチであった。やはり直に北へ向かって深くなっていく。3層では埋戻材水質汚染、傾斜による土質変動を指摘している。また地下泉も検出された。

1層～黒灰色土層で現在水田層、厚さ20～25m、シルト混りで粘りや腐りも中位位である。

2層～腐化剤を含む茶褐色土層、厚さ15m、土壌改良時客土か他のトレンチと異なり一部に山砂と思われる層がある。

3層～暗灰色シルト層、土壌改良車上層を切り取ったような形も見られる。厚さ15m、水質汚染層の堆積が出土した。粘り、腐りもよい。

4層～赤水層の砂などの腐化剤を含む暗茶褐色の泥炭層20～25mの厚さに堆積、粘りは弱い。

5層～暗灰色細砂混りのシルト層、粘りは弱いが、腐りはよい、10mの厚さ。

6層～暗灰色細砂混りの粘土層、厚さ10m位、粘り腐りともよい。

7層～暗茶灰色の粘土層、20～40mの厚さ。

## 8層一砂礫層（基盤層）

### 1～3トレンチ

北より南へのトレンチで堆積層もやはり南へ傾斜している。10m～20mで7分層に堆積している。第3層からの堆積物の検出されている。

1層～灰色細砂混りのシルト層、現在の水田層、20m位位の厚さ。

2層～腐化剤を含む茶褐色細砂混りのシルト層、5mの厚さ。

3層～少量の赤水層の腐植剤、腐化剤を含む暗茶褐色シルト層、厚さ20m位。

4層～腐植土を含む暗灰色細砂混りの粘土層、15m位の厚さ。

5層～腐植土を含む粘土層、15mの厚さ。

6層～腐植物を少し含んだ灰色粘土層、10mの厚さ、粘性、腐りよし。

7層～やや多い腐植物を含む暗灰色粘土層、1.5mの厚さ。

8層～少量の腐植を含む暗茶灰色シルト層、10mの厚さ。

9層～赤水層、多い腐植層、25mの堆積

## 10層一砂礫層（基盤層）

### Cトレンチ

Dトレンチ南に傾いたトレンチである。Dトレンチと異なり土層堆積がやや腐植化している。層々どげれている。基盤層まで2mと深く10m～15mで10分層に堆積しているが他のトレンチより粘土層が厚い。腐植堆積時に大きく乱れられている。

1層～現在の水田層で暗茶褐色シルト混り粘土層、15mの厚さ。



- 2層—増粘性シルト層で酸化鉄を含んで1-5層、厚さ10cm。
- 3層—増粘性粘砂質泥りのシルト層、10cmの厚さ。
- 4層—増粘性シルト層、厚さ10cm。
- 5層—増粘性粘砂質泥りのシルト層7cmの厚さ。
- 6層—増粘性粘砂質泥りのシルト層10cm厚さ。
- 7層—増粘性シルト層、10cmの厚さ。
- 8層—泥質層、厚さ10cm。
- 9層—粘砂質りの増粘性粘土層、厚さ10cm。
- 10層—増粘性粘土層10cmの厚さ。
- 11層—砂質層

図10-1



図10-2



図10-3



図10図 トレンヤ土層断面図2

## 第2節 基本層序

調査地区全域を対象にトレンチ調査（トレンチ14本）を行なった結果、各トレンチに唯一性は無いが、トレンチCを基準として基本層序を把握した。

このうち第3層はこの遺跡の伴埋状態を形成する基盤の又は基盤であるこの層の構成は一面砂の割合が見られるが多くは砂である。第7層は粘土層、第8層は粘質黄土層である。第9層は黄粘土と泥炭状が混じっている層、第4層は灰質黄土第3層黄土、第2層砂分を含んだ黄褐色土、第1層黄土であり砂土である。第1層及び第2層はこの地層及び土壌改良時の埋土、赤土による土壌の人工的な形成が目につく。第3層以下が一応自然埋蔵状態と考えられる。

## 第3節 基本層序と遺構、遺物

以上の基本層序によって調査が行われ、その層序から遺構、遺物が多数検出された。まず層序より出土した遺物について見ると第1層及び第2層からの遺物はほとんど検出されていない。これは土壌改良時以降のためだと考えられる。第3層からは古代から現代までの遺物が集中して多数検出された。現代の磁・陶器・磁器や近世の磁器が上層部から、下層部からは中世東海沿岸の陶器、九州産の陶器、土師質土器、古代土師器、須恵器、木製品がみ、出土物が検出されている。これらの遺物は層位面が断り断りを交わすものではない本拠地と言う性質から年々検出されていたことから埋蔵されているものと考えらるべきであり、第1層及び第2層からの検出とも考えられる。第4層からは土師器、第5層からは弥生土器が少量ではあるが検出されている。

遺構は第3層に集中して検出された。遺構として打ち込まれた木柱列、掘削を伴う木柱列、点検と打ち込まれた木柱列、掘削を伴うよどみくぼ址、第4層からは掘削を伴う木柱列、第7層土層上（第4層）の埋土址、穴川址が検出されている。これらの遺構には伴出した遺物が少ない。

以上の点から各層を見た時、それぞれの時代は表のように考えられる。第3層は弥生時代、第4層は古墳時代早期、第5層と粘土層を切っている穴川址は平安時代か鎌倉時代以降、第3層は鎌倉時代以降と各層の遺物の上から考えることができる。

## 第Ⅳ章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### 1. 遺状遺構

##### ○1号墳

調査地区Aの遺物に位置する遺構で、トレンチ1-1を掘削した際一部が欠損しているが、トレンチ1-1の延長線上に於ける地点で東区方向に向かう遺状遺構と交わり認められる。遺構でみると3層に当たり、5-1階層方向に延びるが、3層上面までの表土を掘削で削った一部を削り取ってしまいその全体をつかむことはできなかった。第1層は黒土であり、土壌改良時の黒土と考えられることから、この遺構は3層に於ける近代のものと思われる。

調査区域全体にわたってつながってはおらず、途中で途が上がって断れている。

西区・C区においても3層でA区の遺状遺構と同様に、白磁などをそのままだいた瓦片を伴い、3層の土を黒土とする層が南北方向に延びている。また瓦片しかみられない遺状遺構からは1号墳築平から3号墳にかけての遺物の破片が出土している。ことから、つながりは掘削できなかったものの土層の埋積状況、層位、遺物、遺構の方向性などから同じ遺構とみなした。A区の掘方向よりのびる層との全長地金は70cm程度差込んでおり中からは、白磁を用いた瓦片と土壌改良時に入ったと思われる草履の遺物が出土した。掘の一部の層には同じ瓦片が打ち込まれているので、一時は本層として機能していたと思われるが、同じ層での水溝遺構が付近に見られないため、明確なことは定かでない。層位、遺物などからみてこの遺構は近代のものとも見て間違いないと思われる。(図13)

##### ○2号墳

調査区域より掘削した遺構で、5-1階層を伴い1号墳と交差している。(図14)

1号墳との切り合い部分に1号墳の遺物の石や木片が2号墳に対して横行していることから、1号墳より古いものである。

4層上面から掘出したもので既の打ち込み状況は態であるが、平均10cmの側壁を掘削部に突き抜けている。この側壁はほぼ直の遺構の掘削部によって同一方向に出土しているので、原本ではなく地の芯として入れられたものであろう。遺構の西側掘削部は掘で人工的に手を入れた痕跡はない。掘の中からは遺物は特に確認されなかった。掘部の地のはば同レベルで遺物のすぐ奥から瓦水溝管が出土しているが、上層からの流入も考えられる。遺物が少なく時代の確定は困難である。掘の方向から水溝遺構からの続きと思われるが、水溝遺構のような直した

彼の打ち込みはなく、2号館の下層である4層が跡残りの強い粘土層であるのでそれほど彼を打ち込む必要がなかったと推定される。トレンチBで大層しており、その西側分にも彼の打ち込みが見られるものも混乱により判断としないが、2号館は水漏れ状態の方向へ延びており、遺構の西がすぐ崩壊になっていることから、水漏れ状態につながる可能性が高い。

### ○3号館

調査北東部で抽出した遺構で3-1P-17を示している。調査対象区外遺構からのびてきて南にむかって緩やかにカーブをしている。トレンチD-2により大層しそれより南からは抽出できなかった。杭は強く強い層であるが、南から遺構の土質層の境界が抽出した。(図21)

層序であると第4層にあたり、上部は砂に覆われていた。ほかの時代の遺物が混入していないことから、この遺構は古墳期に築造つけられよう。

### ○4号館

調査区中央部東部より抽出した。層序は第4層であり、3-1P-17を示している。遺構中央部より東部迄の粘土土質の境界を確認した。2号館と同く強い層である。北側の埋没材は見られない。粘土土層序(図22-2)の他に遺物はなく、混入して来たことも考えられるが、時代は判断としない。

### ○5号館

1号館の北側で1号館と平行している遺構である。トレンチ1-3により遺構の北半分を大層している。この遺構の上部は砂で覆われていた。1号館と平行して南へ伸びているが北側に1号館に侵食されていく。南から円形の木製品(図24-1)が出土したが、時代を決定する遺物は無い。

## 3. 特殊遺構

### ○1号柱石

調査区南東部から抽出した。トレンチC-2と1-1により2ヶ所大層しているが、横断方向、層位、方向性などからみて同一の遺構と判断する。2部分に分かれているので南から1・2・3とする。この遺構は第4層から抽出し、調査と立上りにより構成されている。

1号-1(図25)は3-1P-17を示し、4本の横筋と杭からなっている。横筋は完全に倒れた状態で出土した。杭列は横筋に沿って、南側に打ち込まれている。杭は横筋の下で縦に対して直立あるいは斜交しており、南の打ち込みをおさえていたものと考えられる。この遺構の南

から西風土層が出土している。

1号一室は同じく横壁と柱によりなっている。(図27) N-17'-Eを併せている。

1と比較すると横壁の幅が狭く柱の打ち込まれている間隔が若干広い、西側で長さ約2mの壁がN-17'-E方向に出土したが、これがこの遺構に含まれていたのかは、はっきりとしない。今はどこも横壁に対して柱が直行、あるいは斜交している。時代を確定する遺物は見られないが、4層下より加工土層が出土している。これが遺構部分の土層なのか判断としない。

1号一室はこの遺構のなかで一室北に位置し室にN-17'-Eにのびる横壁とN-17'-Eにのびる横壁から構成されている。(図28) いずれの横壁も1m～2mの長さで壁に沿って柱が直行、あるいは斜交するよう打ち込まれている。また正交だけの柱列がN-17'-Eにのびている。N-17'-Eにのびる横壁の方向性は1・2とは反対であるが、N-17'-Eを併す横壁の先には、同様の遺構は見られない。また、1・2では横壁が一枚であるのに対し、この部分では3枚の横壁が同じ長さでほぼ平行している。壁の幅さと同じ間に柱が壁に直行する壁のうち込まれている。横壁を伴わない柱列もこれとはほぼ同じ方向にのびていることから、この部分は改修が行われていたことが考えられる。打ち込まれている柱は厚いもので1m幅のものが使われており、この部分が一番試みこみの厚いところであったことがうかがわれる。

遺物はほぼ記憶の土層が出土して1号上層からの流入の可能性があるので明確な時代は判断としないが、少なくとも平安時代を断ることはないと考えられる。

## ○2号柱列

1号柱列の南側より出土した。壁厚は厚い壁でありN-17'-Eを併せている。(図29) 打ち込まれている柱は平均して20～25cmほどのかなり短いものであり、先端部もそれほど整形に加工しておらず、中には先端部の加工がみられないものもある。現代における遺構横壁より柱の壁が欠損していることが考えられるが、この遺構には柱に約4mほど長さ2m、幅5cmほどに加工された細い棒状の押さえ木がおかれており、それを見ても壁に上からの影響で柱の壁が欠損していたと考えても、この遺構の柱は初めから他にみられる柱より比較的短くつくられていたことが予想される。この柱の打ち込みはほとんどが地面に対して垂直に打ち込まれており、部分的には壁に打ち込まれている所が見られる。この遺構もトレンチC-2により一部欠損しているが、断面では地層の高まりは確認できず、また付近にも各別の壁は地層の高まりの外は見られないので、この遺構がどのような構造を有していたのかは判断としない。遺物は東田原より7世紀から10世紀後半にかけての木簡・陶器・瓦片など、また東の下層になる第4層の灰褐色粘質土層より古墳期のものと思われる遺物も出土している。遺構以外のものは上層からの流入の可能性はあるが、壁の上下関係からみて近世を断ることはないと考えられる。

### 3. 板状土層

調査地南東部で検出した。何本かの板が打ち込まれているが、傾斜性や方向性は板の数が多いため判別としない。層厚は13世紀から14世紀の土層間の板片がまとまって出土している。また、板片が多くもらびって出ている。層厚は傾斜が多かった為、はっきりとしないが3層のものと思われる。時代は判別としない。(図10)

### 4. 水層状遺構

調査地の西側で検出した。南北的方向にわたっておりその間の板が打ち込まれている遺構である。(図14、15～17) 層厚は3層であり第一層～第三層を示している。板の打ち込み状況にも異なる箇所と板の厚があり、また割り材を用いたものと丸材を用いた通りの板が見られる。割り材の板が最も多く用いられており、これも比較的新しいものと、一部が固定しているものの2つがみられる。丸材は割り材に重って打ち込まれているがほとんどが水層の外側に集中している。また、外側に多い丸材には水層に平行するかたちで板が打込まれている所もある。

北側部分は恐らく、調査地内外の遺構でも同じ方向に延びていると思われる。南側と比較すると板の打ち込まれた遺構は板である。この遺構を抽出する際、北側部分で部分的にかなり掘り進められた。南側では発掘品上に覆われていたことから人為的に掘られたものと思われる。この遺構は遺跡内の流れがみられ、一時的に水が使われていたのではなく、かなりの間その流れを変えながらも水がながれていたことが板の傾斜と数により推測される。少なくとも3回は流れが変わっており、その度に板を打ち込んで改修していた層である。板間は3層間に大別できる。西に位置する2列の板間に打ち込んである方向性も板の形状など不規則である。またこの板間は全体的に板の一部が固定している。この板間がこの遺構の中で最も古いものと思われる。この板間は西にのびながらも徐々に東側する板間に固定され、それより先に同一の板は見られない。

この板間の東側に向かって削れているのが2つ列の板間である。すべてオツラの割り材によりつくられた板で、その形状と加工にある程度の共通性が見られる。この板間は3つの板間中、最も多く板がうちこまれており、西側部の一部では板間のない層間に打ち込まれている。この板間に対応する別層の板間はそれほど打ち込まれていない。東方とも水層の中心から外にかけて板間に打ち込まれている。板によどみ板の数が多く打ち込んでいる所ではそれが顕著にあらわれている。板を並列的に斜めに打ち込むことにより水層の傾斜度を調整していると思われる。板を斜めに打ち込むという工法は、先に打られた貫通孔の調査でも確認されており、地中にあわせて板の打ち込み方向の1層とみることができよう。(図14・17) この板間に対応する別層の遺構には、僅つかの板が打ち込まれているが、水の流れによりその大部分が崩壊している。このことから、共通性が見られる割り材の板が使用され始めてから、丸材に平行する同

にも流路の変化と河川の改修が行われていることが考えられる。

丸紙は本館の再創設に多く見られ、丸紙からもなる枕巻の紙は前の枕巻と比べると最も広い。裏側の列は丸紙による積本があり、左側と右側に分かれるが中央部にはない。裏側の列には積本は見られないが、割り紙の紙に丸紙が打ち込まれているものが見られる。調査区での丸紙を伴う遺物は1号棟があるが、この遺物は近世のもと思われるのでこの丸紙による枕巻もそれに比定できよう。遺物については青紙片・瓦葺屋根の瓦葺・その他陶器類・瓦葺土など様々なものが出土し、遺物の時代鑑定は非常に困難であるが、中世を断ることはないと思われる。

この本館枕巻は割り紙から丸紙への変遷、裏側の積巻方法など、今後の調査となる遺物を多く含んだ遺構であるといえよう。

## 5. 土坑状遺構

本館枕巻北側部分の東に位置している遺構である。3-17'-1を中し、本館枕巻西と西よりの関係があると思われるが、本館枕巻西とのつながりは判然としない。

調査対象外部分のところでも、本館枕巻西と交わっていると思われる。幅が30cm程度の溝状になっており、その直後に直前の中央にむかって紙が覆いならんでいる。打ち込まれた紙も見られるが、紙になった紙は全く打ち込まれていない。(図24) 紙が欠けたものとしてみると紙の丸が規則的にほとんど同一方向に向いているため、人為的なものと推測される。この遺構の時代、本館西側における丸紙としての機能などは判然としないが丸紙を伴わないことから、本館枕巻西での割り紙が用いられたのと同時期に構築していたものと思われる。

## 6. 埋蔵遺物

調査地区では、3号棟4本の埋蔵品調査を実施した。4本のうち3本は1-17'でも土地改良事業時に埋蔵したと思われる遺物を定めて作られており調査区の境を流れる最近まで覆われていた農業用水路につながっていることから土地改良事業に関与したものである可能性が高いため、調査区北側で検出した1号棟の迹から検出した埋蔵遺物のみが土地改良以前につくられたものと思われる。1号をのりて上に小枝を積せた遺構をたつくりであり、3-17'-1写を中すが、遺構の広がりや深さが不明で、一部分だけである。埋蔵遺物の下からの検出であるため、埋蔵状況、遺物などが把握できず、埋蔵遺物以前のものであることは確かであるが、その他のことは不明である。

## 7. 自然遺物

調査区より検出した。(図25) 遺物は第4層で、3-17'-1を中す。遺物の上層は既述土に覆われていたため表層に検出することができた。調査の進展は途中までかなりの溝に覆わ

れているが、下流に行くに従い礫が積まり砂地になる。河原に向かうにつれ流に強くカーブを  
し調査区外に入る。調査中支那のレキから石炭（図51）、産銅下流の砂地のところからは、黒つ  
たの自然泥水と濁水とおもわれるものが出土した。図52の泥炭土が堆積していることから、成  
因は大屯川の氾濫によるものと思われるが一過性のものではなく、水量の増減は不明であるが  
一定の期間は水が流れていたものと推定される。産銅を産出した調査区内では水の取り入れ口も  
しき産銅が伴わないことから、水田産銅との産銅関係はないと思われる。トレンチC-2を掘  
にした北側では、この産銅の産きは産出しなかった。調査層に於うことから他の産銅とのお  
およその前後関係は推察できるものの時代区分は判然としなない。



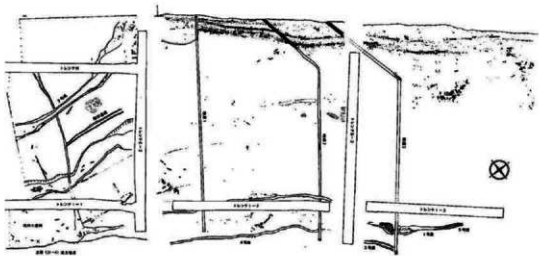


圖1 考古遺址平面圖



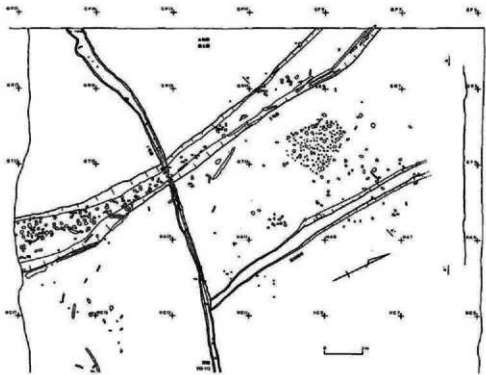


圖17 1号·2号遺跡



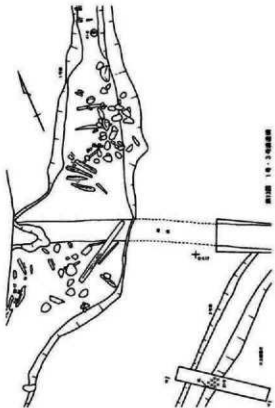


图128 1号·3号植物茎

1/2

1/2



- 1. 木質部
- 2. 木質部
- 3. 木質部
- 4. 木質部
- 5. 木質部

圖1-4 木質部組織 縱切面

1/2



- 1. 木質部
- 2. 木質部

圖1-5 木質部組織 縱切面



圖100 中國地質圖

10

11

12

13

14

15



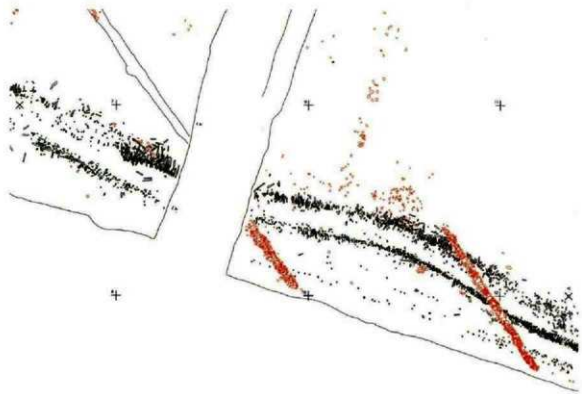


圖170 土地所有權圖



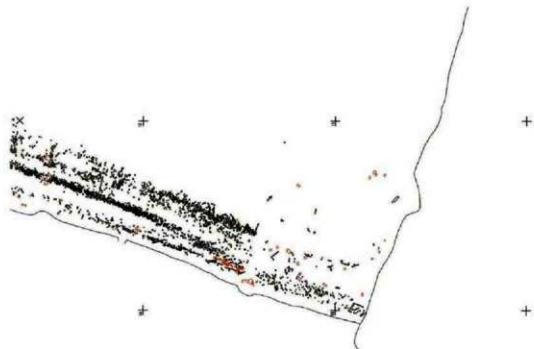


圖100 中點分佈情形





图108 中藥學通論

(34.1.4)

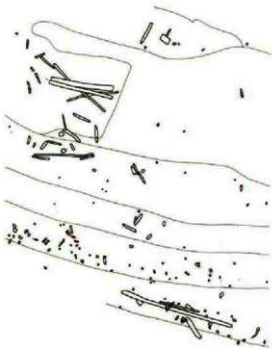


圖 25 本館中遺物 V

1941. 10

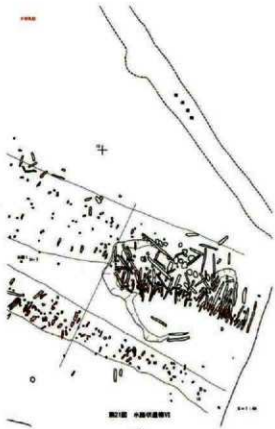
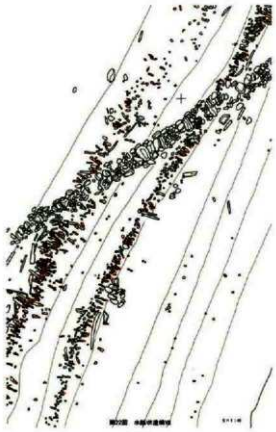
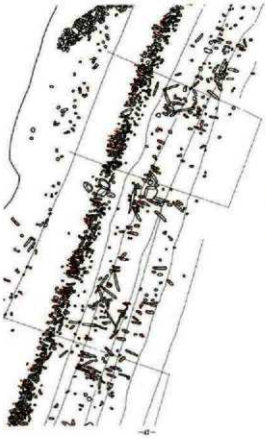


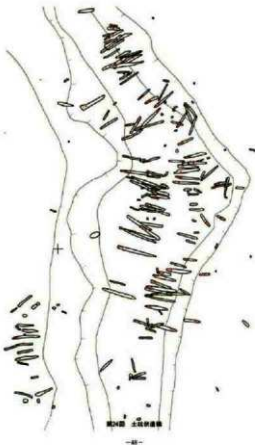
圖 10 中國地圖

2018









Secondary  
Tissue

Secondary  
Tissue

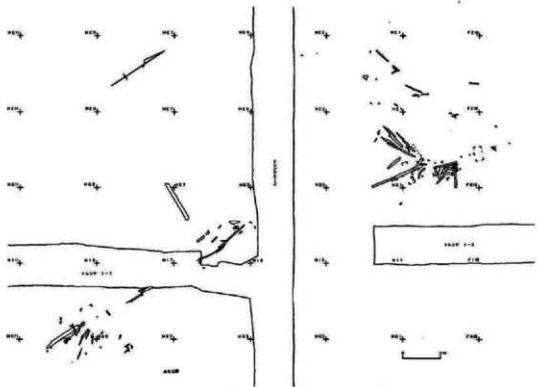


圖20 1号站內 佈局圖



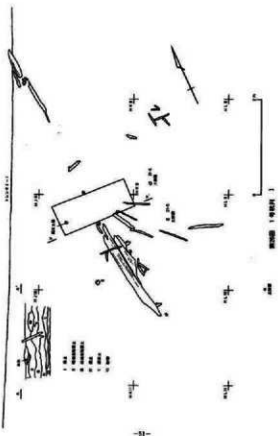


圖 1 粵東地圖

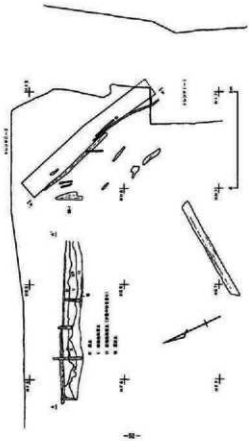
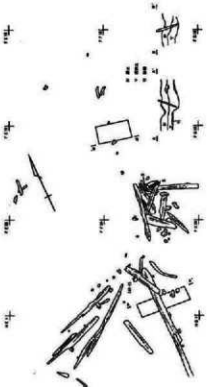


PLATE I







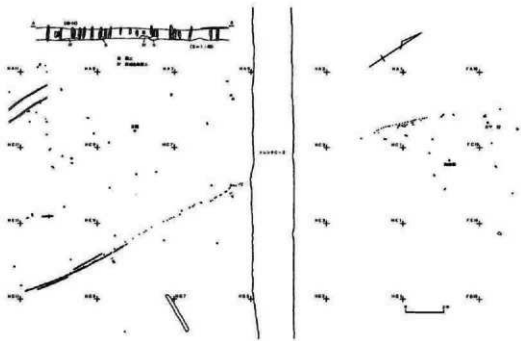


圖 2 船殼內



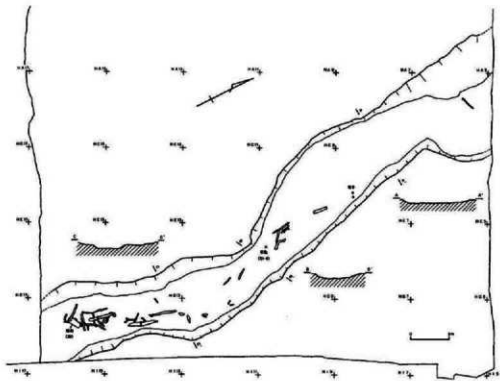


FIG. 10



## 第2節 遺物

### 1. 土製品、土器、陶器、磁器

本調査区から発出されたものは、縄文土器、弥生土器、土器類、阿蘇陶器をけじめ各種の陶器、磁器と縄文土器から江戸時代、近代までの遺物が小断片で多数出土した。多くの遺物が第3層に集中して発出された。小断片であるが美観可能なものの一割を分ず。

#### (1) 近代の遺物 (図21, 22)

第2表 土器 陶器、磁器類

上—口蓋 中—腹部 下—底面

遺物番号	発出地	出土地	器種	寸法	備考	年代
1	—	H101 1	陶土 陶器	—	ネーミングを覚えている。陶土製陶器	縄文
2	—	C-1	陶土 陶器	—	ネーミングを覚えている。土器より粗大	縄文
3	—	F101 4	陶土 陶器	—	器底に厚板を貼している。器土器を伴った使用痕が特徴的。器土器の伴ったものの中より出土。	縄文
4	—	H101	陶土 陶器	—	土器の器底に穴が二つ開いていて、その穴は器底の中央にあり、その穴は器底の中央にあり、その穴は器底の中央にあり。	縄文
5	—	1号館内 17号	土器 陶器	16.4 8.2 1.2	器土器の器底で、内面にも穴が二つ開いていて、その穴は器底の中央にあり、その穴は器底の中央にあり、その穴は器底の中央にあり。	縄文
6	—	H101 1	土器 陶器	6.4 —	陶器	縄文
7	—	H101 1	土器 陶器	1.6 —	陶	縄文
8	—	1号館	土器 陶器	12.1 —	阿蘇陶器 器土器を伴った。陶器製	縄文
9	—	H101	土器 陶器	器底 1.1	土器製土器製である器底から器底の穴が二つ開いている。	縄文
10	—	C-2 17号	陶土 陶器	6.4 1.2	器土器の器底に穴が二つ開いている。器土器を伴った。	縄文
11	—	C-2-4	陶土 陶器	— —	器土器の器底 陶器製 器底製	縄文
12	—	C-1-5	陶土 陶器	— —	器土器の器底 陶器製 (器底)	縄文
13	—	H101	陶土 陶器	— —	器土器の器底 陶器製 (器底) 内面が陶器	縄文
14	—	H101	陶土 陶器	— —	器土器の器底 陶器製 (器底) 内面が陶器	縄文
15	遺物10	C-2-4	陶土 陶器	器底 1.1	器土器の器底 陶器製 (器底) 内面が陶器	縄文
16	遺物10	C-2-1	陶土 陶器	6.4 —	器土器の器底	縄文
17	大館		陶土 陶器	11.4 —	器土器の器底	縄文 縄文
18		F101 器	陶土 陶器	11.2 —	器土器の器底	縄文
19	遺物10	C-2-4	陶土 陶器	11.4 1.2	器土器の器底 陶器製 (器底) F101器底、器土器の器底	縄文 縄文

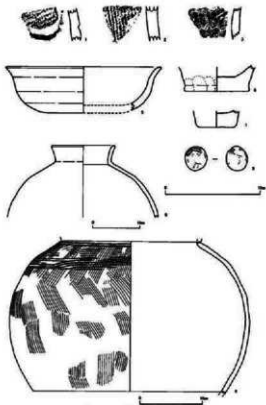


图31图 出土土器复原图·复原图

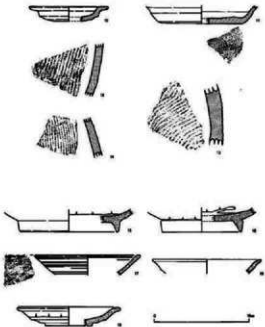


圖 20 出土陶器類圖 - 陶器類

(2) 土壌質土層（カワラケ）(図33.39)

手掘A層土が厚く三角部を示すものB、底部から口縁部へと再曲しているものC、透水性のみのあるものD、口縁部透らみのあるものE、その他をFとした。

図33.39 土壌質土層分類表

上—口蓋 中—透部 下—底土

図号	記号	層 名	特 徴	備 考	層 厚
1	75.2	軟土	軟弱	中層 透水性の強い土層で、厚さ約10cm	10
2	75.3	軟土	軟弱	中層	10
3	75.4	軟土	軟弱	中層 透水性の強い土層で、厚さ約10cm、透水性強	10
4	75.7	軟土	軟弱	中層 透水性強	10
5	75.8	軟土	軟弱	中層	10
6	75.9	軟土	軟弱	中層 透水性の強い土層	10
7	76.0	軟土	軟弱	中層 透水性の強い土層	10
8	76.1	軟土	軟弱	中層 透水性、透部—透部	10
9	76.7	軟土	軟弱	中層 透部	10
10	76.8	軟土	軟弱	中層 透部	10
11	77-1-0	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10
12	76.2	軟土	軟弱	中層 透部	10
13	76.3	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部、透部	10
14	77.7	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10
15	77-2-0	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部、透部	10
16	76.5	軟土	軟弱	中層 透部	10
17	76.6	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10—15
18	77-1-0	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10
19	76.9	軟土	軟弱	中層 透部	10
20	76.4	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10—15
21	76.0	軟土	軟弱	中層 透部	10
22	77-2	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10
23	77-1	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部	10
24	76.5	軟土	軟弱	中層 透部	10
25	76.6	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部、透部、透部	10
26	76.8	軟土	軟弱	中層 透部、透部	10
27	76.9	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部、透部	10—15
28	77-1-0	軟土	軟弱	中層 透部、透部	10
29	76.4	軟土	軟弱	中層 透部	10
30	77.5	軟土	軟弱	中層 透部、透部、透部、透部	10
31	76.7	軟土	軟弱	中層 透部	10



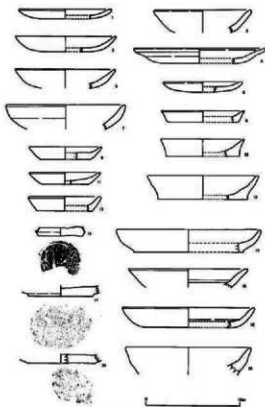
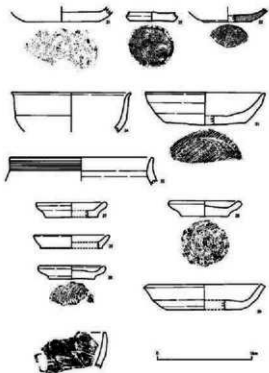


图 10 出土武器·兵器



1000000

图 100 出土铜器、陶器、石器、玉器、漆器

(3) 中世以後の陶器、磁器について

陶器、磁器は多くの種、また部類も豊富に出土された。一つはれも小破片であるが一応部類、部類、時代に分類を試みた。次の通りである。

図4表 土器、陶器、磁器一覽表

産出地	部 類	数量	時 期	産出地	部 類	数量	時 期	産出地	部 類	数量	時 期
西宮町 （古宮）	土器類	2	古墳		土器	1	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器類	1			土器	1		土器	1	古墳	
	土器類	7			土器	1		土器	1	古墳	
	土器類	2			土器	1		土器	1	古墳	
	土器類	1			土器	1		土器	1	古墳	
下中野下	土器類	4	古墳		土器	2	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器類	6			土器	1		土器	1	古墳	
西宮町 古宮	土器	2	古墳		土器	1	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器	3			土器	1		土器	1	古墳	
	土器	1			土器	2		土器	2	古墳	
	土器	1			土器	3		土器	3	古墳	
西宮町 古宮	土器	26	古墳		土器	2	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器	17			土器	1		土器	1	古墳	
	土器	3			土器	4		土器	4	古墳	
	土器	2			土器	1		土器	1	古墳	
	土器	11			土器	1		土器	1	古墳	
西宮町 古宮	土器	2	古墳		土器	1	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器	17			土器	4		土器	4	古墳	
	土器	3			土器	1		土器	1	古墳	
	土器	2			土器	1		土器	1	古墳	
	土器	11			土器	5		土器	5	古墳	
西宮町 古宮	土器	2	古墳		土器	1	古墳	伊予土	土	1	古墳
	土器	1			土器	1		土器	1	古墳	

## (4) 中世以後の陶磁器類 (図25. 26. 27)

表5-8 陶磁、磁器類別表

上—口蓋 中—蓋部 下—底子

図 号 分類名	器名	図 示 品名	出 産 地	出 産 年	出土品	形状	備 考	考 代
1	中世 磁器	C-1	青森県	12世紀	口蓋	磁器	口蓋部、底面の底面が丸みがある。	15
2	中世 磁器	C-2	青森県	12世紀	底子	磁器	底面	15
3	磁器	C-2-1	青森県	12世紀	口蓋	磁器	底面が底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
4	磁器	F-27	青森県	12世紀	底子	磁器	底面が底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15-16
5	磁器	H-2	青森県	12世紀	底子	磁器	底面	15
6	土器	H-2	青森県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
7	磁器	T-12	青森県	12世紀	口蓋	磁器	底面が底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17
8	-	E-1	青森県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	16
9	磁器 磁器	C-3 底	山形県	12世紀	底子	-	底面が丸みがある。	15
10	磁器	C-3-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
11	磁器	E-2	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。	15
12	磁器	C-3 底	山形県	12世紀	底子	磁器	底面	15
13	磁器	C-10	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。	15
14	磁器	E-3	山形県	12世紀	底子	磁器	底面、底面が丸みがある。	15
15	-	E-1	山形県	12世紀	底子	-	底面が丸みがある。	15
16	磁器	C-5	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
17	磁器	E-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17
18	磁器	E-2	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17
19	磁器	T-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面	17-18
20	磁器	E-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17-18
21	磁器	F-2	山形県	12世紀	底子	-	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17-18
22	磁器	H-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
23	土器	C-14	山形県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17
24	中世 土器	C-1-4	山形県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
25	土器	E-17	山形県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17
26	土器	F-1	山形県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
27	土器	C-1-2	山形県	12世紀	底子	土器	底面、底面が丸みがある。底面が丸みがある。	15
28	-	E-1	山形県	12世紀	底子	土器	底面が丸みがある。底面が丸みがある。	17-18
29	磁器	C-1-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面	15
30	磁器 土器	C-1-1	山形県	12世紀	底子	磁器	底面、底面が丸みがある。	15
31	-	F-1-17	山形県	12世紀	底子	土器	底面、底面が丸みがある。	15



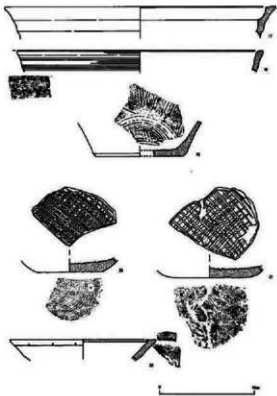


图 10 各种陶器 - 彩陶

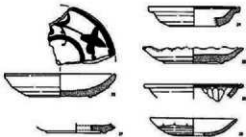


圖17 出土陶器殘片·局部







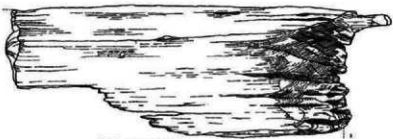
圖四 出土木器殘片(續)

1971.120



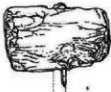
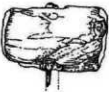
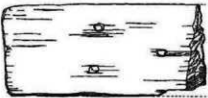
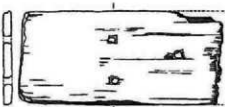


(341.4)



植物学大辞典





(10114)

МОН. ПИЛОНАМЪМЪ

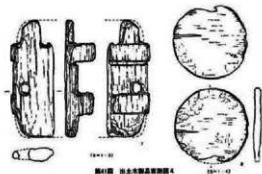
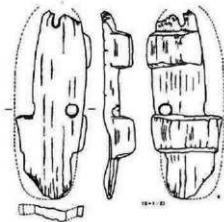
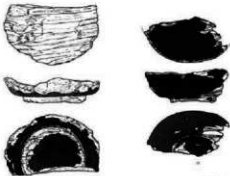


图41 出土铜器图例4



图41 42

图43 出土木器及骨器



第4図 北土木製炭実用図形

本図（図4～5）

本図は第3層と第4層木炭法に準じて本図、処理として打ち込まれたもので製炭法の本にも通している。本図のはほとんどは製炭時において既に炭化が深く進行しているものもあり炭化にいずれも取り上げたが炭化してしまったものもある。また炭化度の少ないものもある。

炭化も炭化度高したものと炭化度低したものの二通りがある。ほとんど炭化度高である。これは第2層、第3層上部の炭化時に炭化度低、炭化されておき打ち込んだ当時の状態を見ることのできるのはい少ない。保存状態のよいものだけに因ってその加工状況の観察から木炭分層を試みた。本図の材質の大部分は、サワラ材で打ち炭化によるみかん製炭材で本図を行っている。炭化部の加工は炭化製の刀物を利用して数回～10回ほどの打撃によりなされているものが多い。

1層 第4層下部から抽出されたもので炭化部の加工が他の本図の加工状態が真なり表面に炭化を有し凹凸して打撃使用とは思われぬもの、刀物を用いたとすれば製炭であると思われる一層。

2層 本口が三角形、または五角形に凹凸部を呈しているもので打撃法によるみかん製炭材でサワラ材を基本とするもの。

3層 本口が正方形ないし六角形を呈するもの、材質サワラ材の硬質角材を基本とするもの、中々炭化のものとよく炭化のものが現れる。



4層 木口が面状のもの、面、面のバランスのとれていないもの、やはりサワ材である程度で真っ直ぐなものと思がありあがったものがある。

5層 木口が丸形のもの、自然のままだ状態を加工してあるもの、材質は他、白樺を利用してあきサワ材以外の木種であるもの。

表7 表木部寸法表

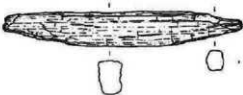
上—1層目 中—1層目 下—1層目

層	材種	寸法	断面	長さ	備考	目 録	層	材種	寸法	断面	長さ	備考	目 録	
														幅
1	白樺	1	幅2 7.2 4.3	5	1層 断面	2	白樺	2	幅2 3.5 4.3	5	C-2	面が割れて割れ た7割程度に入っている	3	C-1 断面
			幅2 3.5 4.7	3	2層 断面				面が割れて入っている					
			幅2 1.2 3.5	1	F-1 断面				一部が割れて入っている					
			幅2 4.5 3	5	1層 断面				面が割れている 面割れている					
3	白樺	3	幅2 4 3.5	7	F-2	4	白樺	14	幅2 7.5 4.7	5	2層 断面	面が割れて入っている	5	C-1 断面
			幅2 4.5 3.5	5	C-2				面が割れて入っている					
			幅2 3.5 4.4	12	1層 断面				面が割れて入っている					
			幅2 3.5 3.5	5	C-1				面が割れて入っている					
			幅2 4.2 3.4	7	C-1				面が割れて入っている					

断面が木口が面状のもの、面、面のバランスのとれていないもの、やはりサワ材である程度で真っ直ぐなものと思がありあがったものがある。

図例 (図6)

図3層、図4層から抽出されたもので、地味土質の芯、木口土質の芯として用いられたものであり木口を伴って抽出されている。材質はサワ材で断面を利用して、長さ1mから2m、厚さ2cmから3cm、巾15cmのものがあり抽出された。図りによる材質であるが万物の寸法は見られない。(長さ15.5巾15cm厚さ2cm厚さ層の土質)



1941-42



图46 马土中植物化石

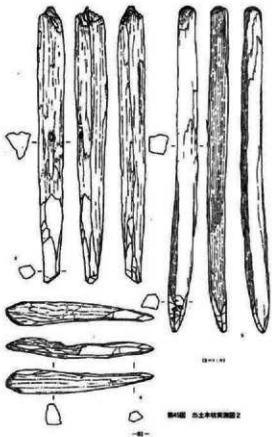
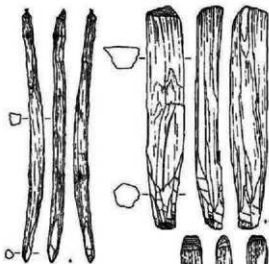


图414

图415 马士草的茎部图2



.....



.....



18-11-42



图42 点土根·根茎类



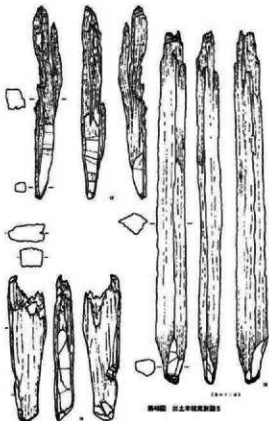


图44 出土骨器类器形

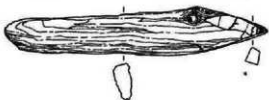


图 10 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜



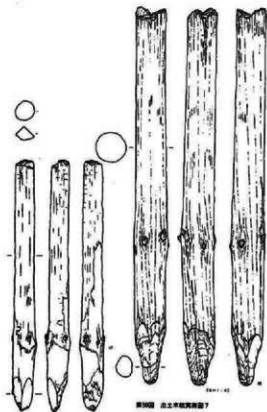


图100 兰土草植物图7

### 3. 石 器 (図4)

今回の調査地において検出された石器は縄文時代の石器や打製石片・石鏃、弥生時代の磨製石器、及び中世以後の磁石である。

表 3 表 石 器 類 一 覧 表

検出番号	分 類	産 地	出土状況	備 考	備 考
1	打 製	磨 礫 石	F3-4	弥生前期石器、内面両面によって中心部が削られており、断面がU字型を呈している。	
2	打 製	チャート	C-2	弥生前期石器、両面の両側にあまりない、断面両端で中心部が、断面がU字型を呈している。	図4-1 一断面
3	打 製	磨 礫 石	C-3	本居石器、内面両端で中心部が一般に磨製用石片ともなる形状。	
4	打 製	チャート	埋蔵1	磨製であるが欠けている、つばあが中央に薄く、刃部に両側面が呈している。	埋蔵品
5	打製石片	砂 岩	C-1	磨製に近する、刃部に両側面が呈している。また、刃部の両端が丁寧である。	丁頭石
6	打製石片	砂 岩	F3-3	磨製に近するが両側面が磨製されている、刃部に両側面が呈する、刃部両端が、内面両端は多少の欠損がある。	丁頭石
7	打製石片	砂 岩	C3-3	磨製石、両面を両側面を利用し、刃部を両側面両端丁寧に磨製している、刃部が鋭い。	
8	磨 製	磨 礫 石	埋蔵1	磨製を呈しており両側面が両面に両方に磨製されている、刃部も両側に両側面が呈している、刃部は多少の欠損がある。	丁頭石
9	磨 製	磨 礫 石	C-2	両側面は両側面にのみで内面ともに斜方形に両側面が磨製。	小片
10	磨 製	磨 礫 石	F3-3	両側面は一面であり、やや両側面が呈する、両側面が呈している。	小片

石器は図3層土の中より検出されたものであり混入されたものと考えられる。打製石片も同じと考えられる。但しそれは層上より検出されている。調査地は東京の保土巻遺跡に調査の調査層上から検出された石片がC1により縄文晩期に属する報告がありこのものは混入ではないと考えたい。磨製石器は層2中世期の位の層下より検出されており層下層にあたり弥生期であるのでこれも混入したものでないと考えられる。

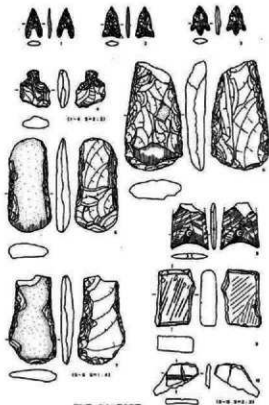


图4图 出土石器的种类

4. 金貨部 (図22, 23, 24)

金貨部として、中世、近世の銀貨、近世の銅貨、近代、現代の銀貨、高品質である。

図22表 金貨部種類一覧表

上—右 中—中 下—左

図番号	品名	材質	直径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	出所
1	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治初期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
2	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治中期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
3	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治後期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
4	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
5	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
6	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	
7	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
8	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
9	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
10	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
11	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
12	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
13	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
14	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
15	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
16	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
17	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
18	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
19	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。
20	銀貨	銀	27.5	1.5	5.0	明治末期の銀貨で、中央に「明治」の文字が刻まれている。裏面は龍のデザインが施されている。	明治末期、高品質の銀貨である。

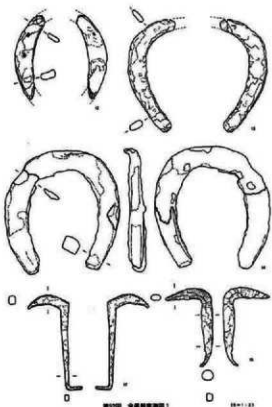


图 22 全属的线虫 1

图 23 23



图47-22

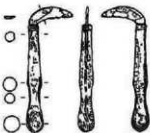


图47-23

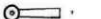
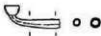


图47-24



图47-25

图48 金质货币形器



图48 金质货币形器

图48-116



## 第V章 プラント・オパール分析結果

古 澤 隆 研 究 所

### 1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析に用いて、高輪遺跡（中野地区）における耕作層の調査を試みたものである。

### 2. 試料

1992年7月3日に現地調査を行った。調査地点は、M1～M8の8地点である（図1）。試料は、各調査地点の上層遺層において各層ごとに3～10cmの間隔で採取した。試料採取には、質量50gの富士管およびゴボロ管等を用いた。試料数は計45点である。

なお、層名は各地点において層別の変化ごとに付けた番号であり、地点間の対応関係を示すものではない。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（標準、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料上の焼灰（100℃・24時間）、収比定量法
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（重量約40μm、約0.02g）  
※電子分析天秤により1万分の1までの精度で秤量
- (3) 電子秤測定法による炭素同位体測定
- (4) 超音波による分散（300W・40kHz・30分間）
- (5) 比重液による浮遊率（25μm以下）除去、乾燥
- (6) 吸入筒（オイクェット）中に分散、プレバートン作成
- (7) 焼灰・秤量

同定は、植物繊維質試体に含有するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと呼ぶ）を主たる対象とし、400倍の顕微鏡観察下で行った。計数は、ガラスビーズ添加が300以上になるまで行った。これはほぼプレバートン1微分の割合に相当する。試料1gあたりガラスビーズ添加に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ添加の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール含量を求めた。

また、この値に試料の収比量と各種物の換算係数（植物繊維質換算1gあたりの植物体重量、単位：10<sup>3</sup>g）をかけて、単位面積で植物1ヶ所あたりの植物体重量を算出した。換算係数は、イネは赤松、ヨシはヨシ、タケ類はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.34（換算量は1.00）、6.31、6.47である（村山・藤原、1997）。



#### 4. 分析結果

プリント・オーバーン分析の結果をまとめおよび図4、図5に示す。なお、製作時の温度および湿度が定量的であるため、同定および定量は、イネ、コシ飯、アケミ科、ウシヤササ（ヌスチヤササなどが含まれる）、キト飯（ヒメなどが含まれる）の主要な成分群に限定した。専らに各成分群の検出感度を示す。

#### 5. 考 察

##### (1) 製作の可能性について

本実験（製作群）の検出や同定を行う場合、一般にイネのプリント・オーバーンが試料1gあたりおよそ1,000個以上高い密度で検出された場合に、そこで製作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプリント・オーバーン密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくくなり、その層で製作が行われていた可能性はより現実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに製作の可能性について検討を行った。

##### ① 施1地点

施1地点では、1～4層について分析を行った。その結果、1～4層においてイネのプリント・オーバーンが検出された。このうち、1層（埋土上）ではプリント・オーバーン密度が2,000個/gと非常に高い値である。これは同定地点の状況が本所であることと符号する。また、2層についても比較的最近の本所製作に由来するものと考えられる。3層と4層では、密度が10,000個/g以上と非常に高い値である。したがって、これらの層で製作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。

##### ② 施2地点

施2地点では、2～4層について分析を行った。その結果、2層と3層からイネのプリント・オーバーンが検出された。密度は7,000～8,000個/gと高い値であることから、これらの層で製作が行われていた可能性は高いと考えられる。

##### ③ 施3地点

施3地点では、1～7層について分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプリント・オーバーンが検出された。このうち、1層（埋土上）および2層で検出されたプリント・オーバーンは、現在もしくは比較的最近の本所製作に由来するものと考えられる。3層、4層、6層、7層では密度がいずれも1,000個/g以上と高い値であり、4層や6層では別個のピークが認められた。したがって、これらの層で製作が行われていた可能性は高いと考えられる。5層では、密度が7,000～8,000個/gと比較的高い値であることから製作の可能性は考えられるものの、上層や後世からの混入の可能性も否定できない。

#### ㊦ ㊦4地点

㊦4地点では、3層と4層について分析を行った。その結果、両層からイネのプラント・オペールが抽出された。このうち3層では濃度が19,000個/㎡以上と極めて高く、4層でも濃度が7,000個/㎡以上と高い値である。したがって、これらの層で操作が行われた可能性が高いと考えられる。

#### ㊦ ㊦5地点

㊦5地点では、3～5層について分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプラント・オペールが抽出された。このうち、4層上層では濃度が9,000個/㎡と高い値である。両層を比べて認められた。したがって、両層で操作が行われていた可能性は高いと考えられる。3層と5層では濃度が2,000個/㎡以下と比較的低い値であることから操作の可能性はかんがえられないもの、上層などからの流入の可能性も否定できない。

#### ㊦ ㊦6地点

㊦6地点では、3層と4層について分析を行った。その結果、3層からイネのプラント・オペールが抽出されたが濃度は2,000個/㎡と比較的低い値である。したがって、両層で操作が行われていた可能性は考えられるもの、上層などからの流入の可能性も否定できない。

#### ㊦ ㊦7地点

㊦7地点では、1～5層について分析を行った。その結果、1～4層でイネのプラント・オペールが抽出された。このうち、1層および3層で抽出されたプラント・オペールは、濃度もしくは比較的濃度の水は操作に由来するものと考えられる。3層と4層では濃度が6,000個/㎡以上と高い値である。したがって、これらの層で操作が行われていた可能性は高いと考えられる。

#### ㊦ ㊦8地点

㊦8地点では、2～4層について分析を行った。その結果、2層と3層上層からイネのプラント・オペールが抽出された。このうち、2層では、濃度が9,000個/㎡と高い値である。したがって、両層で操作が行われていた可能性は高いと考えられる。3層上層では濃度が1,000個/㎡と低い値であることから操作の可能性は考えられるもの、上層などからの流入の可能性も否定できない。

### (2) 汚染度の推定 (図5参照)

ネイズなどのアケ資料植物は比較的暖かい土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的冷たい土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の汚染程度 (程度) を推定することができる。

本調査では、全体的にヨシ属が優勢であり、アケ資料は比較的少量である。特に、イネの出現的およびイネが減少する層ではヨシ属が圧倒的に卓越している。このことから、調査区

一般に製作の開始以前に採れたヨシ風が管理する遺跡等であったものと考えられ、そこを調査して本館が造成されたものと推定される。また、イネの遺骸は最も数多くとしてヨシ風が多く見られることから、水田跡等などとしてヨシ風が生育していた可能性も考えられる。

### 6. まとめ

以上のように、№1地点の3層、4層、№2地点の3層、№3地点の3層、4層、6層、7層、№4地点の3層、4層、№5地点の4層、№7地点の3層、4層の各層ではイネのプラント・オーバー・オールが多量に検出され、これらの層に耕作跡が確認されている可能性が高いと判断された。

### 【参考文献】

杉山眞二・藤原文忠	1967	川口市赤山縄文遺跡跡地におけるプラント・オーバー・オール分析。 赤山一古墳発掘一、川口市埋蔵文化財報告、第10巻、221-226。
藤原文忠	1976	プラント・オーバー・オール分析法の基礎的研究(1) 一奈良イネ科植物標本の生体標本カードと炭化分析一。 考古学と自然科学、9: 15-25。
藤原文忠	1979	プラント・オーバー・オール分析法の基礎的研究(3) 一福岡、桜井遺跡(夜台式)水田および稲馬・田圃遺跡 (弥生時代)水田におけるイネ ( <i>O. sativa</i> L.) 生産履歴の 調査一。 考古学と自然科学、12: 29-41。
藤原文忠・杉山眞二	1984	プラント・オーバー・オール分析法の基礎的研究(5) 一プラント・オーバー・オール分析による水田址の調査一。 考古学と自然科学、17: 73-83。

表1 プラント・オパール分類結果

表1-1 表1-2

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表1-3

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表1-4

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表1-5

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表1-6

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表1-7

種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

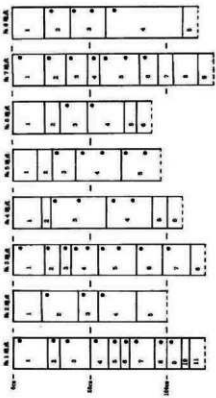
表 10

項目	1955 年	1956 年	1957 年	1958 年	1959 年	1960 年	1961 年	1962 年	1963 年
1. 国民生产总值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
2. 工业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
3. 农业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
4. 建筑业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
5. 商业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
6. 服务业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
7. 其他行业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表 11

項目	1955 年	1956 年	1957 年	1958 年	1959 年	1960 年	1961 年	1962 年	1963 年
1. 国民生产总值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
2. 工业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
3. 农业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
4. 建筑业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
5. 商业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
6. 服务业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100
7. 其他行业总产值	100	100	100	100	100	100	100	100	100

圖 1 土壤剖面 (厘米) 剖面 剖面 剖面



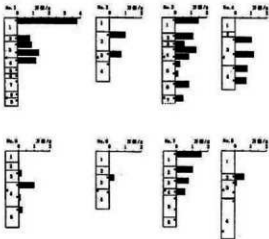


図4 イネのプラント・オパールの出出状況

(注) 単位は千ドル、輸出額は百万円

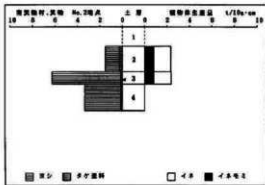
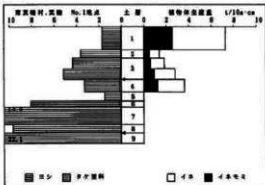
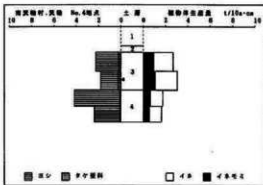
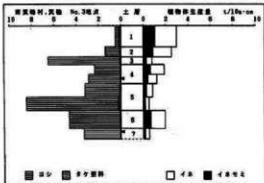
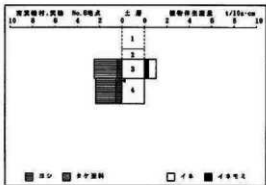
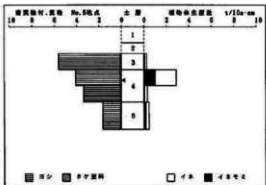
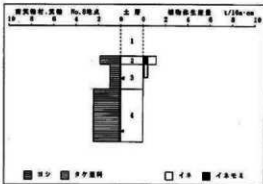
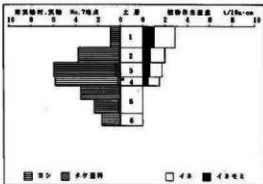


図5 野山植物の埋没断面長と位置









真鍮製から製造されたプラント・オパール製の標準電極

真鍮率はすべて40%

No.	合 成 部	塩 濃 度	試 料 名
1	イネ	5.4	3-2
2	イネ	5.3	4-1
3	イネ	5.3	7
4	イネの塩類(國の真鍮製電極)	5.3	7
5	コシ炭	5.3	8
6	シバ炭	5.4	3-1
7	チヤ炭質	5.4	3-2
8	ウシクヤ炭(ススキ炭など)	5.3	4-2
9	イネ炭の真鍮製電極	5.3	4-1



Fig. 1



Fig. 2

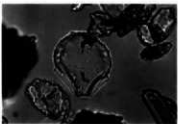


Fig. 3



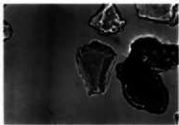
Fig. 4



Fig. 5



Fig. 6



2



3



4

## 第Ⅴ章 總 括

異輪遺跡の調査は異輪町と西宮輪村の双方でそれぞれ調査が行われてきたが、部分的な調査であり、今回の調査は異輪遺跡における最大規模の調査であった。それ故、新たに確認されたものが多く、またよりあがた遺物の量も多かった。今回の調査地が生育地場と地層の環境がよく土層の堆積状態が良好であったことなどから、異輪遺跡における水田層の位置などについて新たな事実と認識を加えることができたことは、調査計画調査というあつたしく行われた中で最大の収穫といえよう。異輪遺跡の問題は各層の遺物の時代決定が課題であり、各時代の水田遺跡の全体像が抽出されていないところにある。それには調査の技術的な問題として取り組んで行く必要がある。

今回の調査では遺物を堆積の芯にいたる程度まで、掘りに従って込み基礎を調査させる方法等、水田遺跡の遺物の抽出に異輪遺跡内でははじめてのことであり、全国的に見られる水田遺跡の調査技術が伊勢にも伝わってきたことを確認する上でひとつの資料となったが、これらの遺物の時代を明確化することはできなかった。

調査地が生育地場と書っても形成時は天竜川の影響を受けており、天竜川によりできたよどみの部分に土層が堆積していったために層に大きなうねりが見られ、掘削の進み込んだ層以上の土層の堆積が見られる部分に遺構、遺物が残まっていることが明らかとなった。これは時代を遡るほど顕著となってくように見られる。中世時代に遡ってではあるが、各時代の遺物を含む包層が比較的安定しており、層によるおおよその時代的判別ができた。自然は昭和37年から行われた土地改良時に灌漑の施設、排水地を切り直し、土をのせただけだったので第1層から3層はその時代の表土である。第3層は遺構はあるが遺物から見てかなりの時代の層をもち、中世から近代とすることができよう。第4層は、上層からの遺物の混入も少なく平安室町から徳川初期の中世と見ることができ、第5層から6層は層中より遺物不揃、6層上層より東海系系下層成層土層が出土しているので終生時代後期から古墳時代に比定できる。プラントオーバー分析の調査では、土層の堆積状況のよいところでは明確なゾーンがみつめられ最下層では第7層下層もプラントオーバーを抽出し、科学的にもこの地で古くから耕作が行われていたことが証明された。先に述べた、古い時代になるほど水田の遺構が顕著するというのは、6層の底がより古層である川川段に南北に横切っており、そこに伊勢川の遺構遺跡に代表される水田・畑などによる人為的な水田遺構が見られないことから、遺構にのびた異輪層での極めて物歩的な耕作遺構が想定できる。つまり収穫量を増やすための耕作技術が古刹。この地ほどの程度「水」と共に入って来たのが問題となる。これは異輪遺跡がもつ川地層遺跡として性格を加えようとして一つの糸口になると考える。今回の調査だけでは判断することはできない



ので、今後の調査では地下層の土質層まで掘削し調査をする必要がある。

出土した遺物についてであるが、調査面積の広さに対してはその数も過去の発掘調査の調査の中でも一番のものとなり、様々なものが出土して中でも土器・陶磁器類は中世の発掘調査とこの地の歴史を知る一つの資料となった。まず、日誌から以後記にかけての一部の瓦面調査しかもち得なかった遺物が多数出土したことである。これは当時この地に有力者がいたことを物語るが、支那などでもこの時期のことははっきりしておらず、今後の調査研究の参考になることである。また発掘箇所の地帯により当時の経済活動、物品の流通状況など過去の生活環境の一端を知ることができた。

しかし、本調査地点は本調査地帯であることを考えると、疑問が生れる。瓦面物が第3層に集中し、土器・陶磁器が第2層に存在していること。遺物土遺物は有力者の使用するものが多かったこと。瓦面物が近い層の本調査地帯であればよいが、調査地点北東200mのところには発掘町の中層地帯がある。この地帯は武蔵の標高地に位置していた。昔からこの標高地から中野地区の本調査地帯について瓦土、または磁土をしたと伝えられる。昭和30年代の土地改良事業においてもトッコフで土を運んできたという。平成元年発掘町の中層地帯を調査したが、遺物・遺物のすこぶる少なかった。(報告書)本調査地点で出土した遺物の一部は運ばれてきたものと考えたい。従って直接発掘調査が使用したものでないと考えると疑問が解ける。

発掘調査が学会に注目されて以後の中、関係機関、関係者の協力によりしだいにその情報が明らかになってきている。しかし、いまだその全容のほとんどがつかめていないのが現状である。しかし、発掘調査内における関心は年々とも増加し、調査の道一つはなほ成長にきている。過去の情報をあわせてこの地帯を今後、いかにして発展し経済に振返っていくかを関係者は真剣に考えていくべきであろう。



また今回の調査で取りました、瓦の破した本瓦片(本瓦)と噴霧器の瓦面部分を埋戻し埋戻した土層の状況により取り出し観察できるようにもなれば、幸せである。ここに条件を前、本上の機材を売りにつけてまた発掘調査の能を見ることのできる機会に中世に留めさせます。

最後になりましたが関係者の中、長い間調査にご協力、ご努力いただいたまました関係機関・関係者の方々、調査計画をしていただいた市文化財課長久保先生、小池工事、本調査方面の指導助言をいただいた大竹工事、中世以前の発掘調査について事にご助言いただいた理文センターの河津門先生の方々に深く感謝し厚く御礼申し上げます。

調査関係 本 岡 博 明

参 考 文 献

- 1 愛知県教育委員会1989『愛知通観』第1巻
- 2 愛知県教育委員会1991『愛知通観』第2巻
- 3 愛知県教育委員会1992『愛知通観』第3巻
- 4 愛知県教育委員会1993『愛知通観』第4巻
- 5 愛知県教育委員会1994『愛知通観』第5巻
- 6 愛知県教育委員会1995『愛知通観』第6巻
- 7 愛知県教育委員会1997『愛知通観』第7巻
- 8 愛知県教育委員会1998『愛知通観（国中・高校地域）』
- 9 長野県教育委員会1991『信州川西通観』
- 10 長野県教育委員会1992『信北通観』
- 11 静岡県地域文化財センター1993『多摩ニュータウン通観』
- 12 中部建設協会 1988『天竜川上流地域管理』
- 13 山内康樹 1993『やまもの鑑定入門』
- 14 矢野金吾 1993『日本やまもの入門』
- 15 静岡県地域文化財調査研究所 1986『川合通観』
- 16 静岡県地域文化財調査研究所 1988『御名通観』
- 17 静岡県地域文化財調査研究所 1989『長鳴通観』
- 18 長野県教育委員会1990『信州山形通観（6）』
- 19 長野県立村行会 1991『長野県史』考古資料編下・国領郡
- 20 長野県立村行会 1991『長野県史』国領・国領
- 21 信濃尾村村史編纂委員会 1990『信濃尾村史』上巻
- 22 信濃尾村村史編纂委員会 1990『信濃尾村史』下巻
- 23 藤嶋彰一監 1976『美濃の古蹟』
- 24 加藤康久監 1979『美濃陶器大辞典』

# 版 圖



1-1 0000

建築師事務所建築



圖 2 地景



圖 3 地景



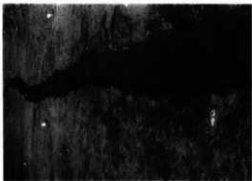
トレンチロー1 土層断面



トレンチロー2 土層断面



溝形遺構 1 号



溝形遺構 4 号

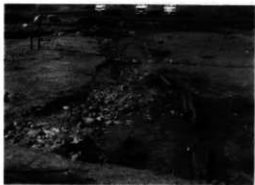


圖 5 遺址遺構 2 号

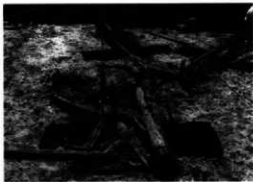


圖 6 遺址遺構





1 號木料 II



1 號木料 III



2 号坑



1 号木棺



墳墓遺構 1



墳墓遺構 2



土壤剖面圖



土壤剖面圖



图 10

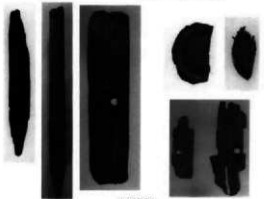
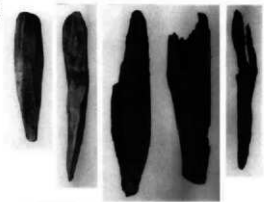


图 1



图版 12



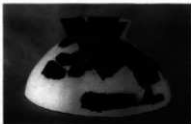
三十一







黑土土器



黑土土器



黑土土器



黑土土器

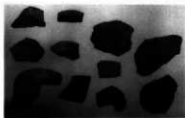
出土陶文土版



出土土版等土版 1



出土土版等土版 2

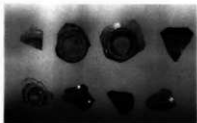


出土泥板等





出土陶器 1



出土陶器 2

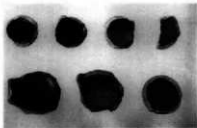


出土陶器 3



出土陶器 4

出土陶器 5



出土陶器 6

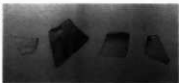


图 19 甲

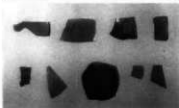


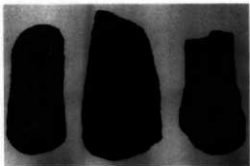
图 19 乙



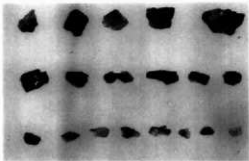
图 19 丙



图 19 丁



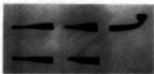
圖版 20



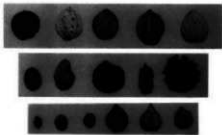
圖版 20



出土金器圖1



出土金器圖2



出土金器圖3



## 笑 輪 遠 跡

上伊那郡南箕輪村産ノ井中池地区  
工場用物産成等並ニ伴フ  
環境文化財調査委員会

1993年3月 印刷

1993年3月 発行

発行所 長野県南箕輪村教育委員会

印刷所 伊那市 鶴小印刷舎印刷所

